

立正大学史紀要

第5号



表紙写真：日蓮宗大学林講堂前庭園 [1906 (明治39) 年6月]
(『立正大学の百二十年』より転載)

立正大学史料編纂室

日・中友好 1989

立正大学・新疆大学合同シルクロード踏査

1989 (平成元) 年7月21日～9月29日



新疆大学での歓迎の様子 1989 (平成元) 年7月28日



立正大学・新疆大学合同シルクロード踏査隊集合写真 1989 (平成元) 年8月 日付不明



崑崙山脈ウルグ・ムスターグ峰（6,973m）登山の様子 1989（平成元）年8月19日



テントでの野営に協力する現地の女性たち 1989（平成元）年9月14日

立正大学史紀要 第5号 目次

《講演会記録》

『東海大学七十五年史』の編纂を終えて

椿田 卓士 3

《オーラル・ヒストリー》

高村弘毅名誉教授 オーラル・ヒストリー

25

《余録》

谷山ヶ丘に建つ新校舎―絵はがきからの考察―

平 伊佐雄 47

《彙報》

平成三十年度 史料編纂室業務記録（抄）

57

令和元年度 立正大学百五十年史編纂委員会委員一覧

立正大学百五十年史編集委員会委員一覧

立正大学史料編纂室運営委員一覧

立正大学史料編纂室専門委員一覧

立正大学史紀要編集委員一覧

立正大学史料編纂室スタッフ一覧

立正大学史料編纂室紀要発行要領

『東海大学七十五年史』の編纂を終えて

椿 田 卓 士

司会…定刻となりましたので、第六回立正大学史料編纂室主催講習会、『東海大学七十五年史』の編纂を終えて」を開催させていただきます。皆さまお忙しいところお立ち寄りくださいます。誠にありがとうございます。まずは講師のご紹介を含めて、立正大学史料編纂室の野沢佳美室長より一言ご挨拶させていただきます。

野沢…立正大学史料編纂室長の野沢と申します。今日はご多忙のところお集まりいただきましてありがとうございます。また、本日の講演をお受けいただきました椿田様には御礼を申し上げます。

私ども立正大学は二〇二二（令和四）年に創立一五〇年という節目を迎えます。現在、編纂室が開室されて六年目、『立正大学百五十年史』を編纂するため様々な事業を行っております。これまで創立一二〇年、一四〇年という節目の時に記念誌を刊行してきました。その都度、委員会が作られたものの、史料をあちこちに移動してそのうちになくなってしまふということが少なからずあったと思っております。そのような中、今から六年前に大学史料編纂室を立ち上げ、恒常的な史料収集の実施、史料の保存、整備、情報公開、そして『百五十年史』の編纂に着手しております。

本学にとって『百五十年史』というのは初めての経験であり、いかに事を進めれば良いのか、まさに手探りでやっております。必ずしも順調とは言えないところもありますが、あと3年弱でどこにもなかった『百五十年史』を刊行するため、様々な取り組みを行っており、その一つとして、この時期に講習会を開いております。本講習会は、我々編纂室のスタッフの学習の機会であるとともに、関係者の方々との情報交換の場にしようということで初代の室長の時に始まりました。

昨年は、国士館史料資料室の熊本好宏様にお越しいただき、『国士館百年史』の編纂にまつわるご苦労話をお聞きました。今回は東海大学様が『七十五年史』を出されたということで、椿田様をお招きし、私どもが経験していない年史の編纂、編集についてご苦労話も含めてご意見をお伺いし、今後の活動の参考にさせていただきますと考えております。

椿田様のご経歴を申し上げます。一九六三（昭和三八）年に静岡県でお生まれになり、一九八一（昭和五十六）年に東海大学文学部史学科の日本史課程に入学されました。一九八六（昭和六十一）年度に同文学研究科修士課程を修了しております。専攻は日本近世史でございます。その後、各地の自治体史の編纂業務に携わり、二〇〇四（平成十六）年に東海大学学園史資料センター



に入職され、現在に至っております。『東海大学七十五年史』では、編纂の中心として活躍されたと承っております。椿田様、今日はどうぞよろしくお願い致します。

皆さまこんにちは。東海大学学園史資料センターの椿田と申します。ご紹介にもありましたように、私もともと日本史を勉強しており、とりわけ日本近世史を専攻し、江戸時代の古文書を扱っております。大

学院を出ましてからは自治体史の編纂に携わってきました。有体に言うと、蔵の中から古文書を探し出し、それを整理し編纂してありました。その後、縁がありまして現在の職に就いております。

もともと日本近世史を始めたというのも大学に入った四月に、いきなり勉強会で古文書を読む特訓を受けまして、いろいろと調査に行くようになったというのが契機であったと思います。そういったかたちで歴史に関わるようになり、今は大学史に関わる部署で仕事をさせていただいております。

はじめに

私も東海大学は、建学七十五周年記念事業の一環として、二〇一七（平成二十九）年度に『東海大学七十五年史』（以下、『七十五年史』）の図録を、翌二〇一八（平成三十）年度に同じく通史篇と部局篇を刊行しました。今日は『東海大学七十五年史』の編纂を終えて」とのタイトルで、『七十五年史』刊行に至るまでの過程を中心に話させていただきます。

まず本学の簡単な説明を致します。建学七十五周年と申し上げましたが、厳密には二〇一七（平成二十九）年の建学記念日である十一月一日がその日に当たります。本学のスタートについては、戦時下の一九四二（昭和十七）年十二月に法人認可となり、その翌年に、静岡県清水市（現在の静岡市清水区）に開校された航空科学専門学校が本学のスタートになります。

本学の『七十五年史』に至るまでに発刊した成果は五点あります。まず一点目が『回顧と前進 東海大学建学の記』（一九六三年刊）で、創立二十周年の時に作られたものです。次に『前進する東海大学』（一九六七年刊）が二十五周年を、そして『三十年の歩み』（一九七二年刊）が三十周年を記念し作成されました。この『三十年の歩み』の刊行時に資料室ができてまして、これが言わば学園史資料センターの源流になっております。そして『東海大学建学史』（一九八二年刊）が四十周年を記念して作られ、五十周年を記念して『東海大学五十年史』（通史篇、部局篇、図録）が一九九三（平成五）年に刊行されました。

このように五本の年史がありますが、資料に基づいた本格的な通史は『東海大学五十年史』が初めてです。それ以前のものは、ある意味ダイジェスト、読み物的なものであり、学園全体の動きを網羅したものではなかったと思います。あと、ご覧いただくと分かるのですが、『五十年史』と『七十五年史』は全く同じ装丁です。『七十五年史』は『五十年史』を引き継ぐかたちとなっており、通史篇と部局篇そして図録篇と構成も同じです。

私が所属する学園史資料センターは、二〇〇三（平成十五）年四月に学校法人直属機関として代々木校舎内に設置され、翌年、神奈川県平塚市にある湘南校舎に移転しました。施設としては事務室のほか、収蔵庫、整理された資料を収めた保管庫があります。本センターの業務については、「学校法人東海大学組織及び業務分掌規程」に「法人年鑑、年史の編纂及び作成に関すること」と位置づけられています。

一、『七十五年史』編纂事業の組織体制

続いて『七十五年史』編纂事業の組織体制についてご説明させていただきます。『七十五年史』の編纂体制が実際に動き出したのは二〇一一（平成二十三）年です。同年一月六日に学校法人東海大学建学75周年記念事業委員会が発足しました。この委員会が親会になり記念事業の全体を統括するとともに、二つの専門部会を組織し、学園の将来ビジョン、ミッション、募金、記念式について検討を行うことになりました。

二つの専門部会とは、二〇一二（平成二十四）年四月一日に発足

した、学校法人東海大学建学七十五周年記念事業募金委員会と学校法人東海大学建学七十五周年記念誌編纂委員会です。このうちの記念誌編纂委員会の検討を踏まえて、二〇一二（平成二十四）年度のうちに記念誌の基本方針と骨子の策定が行われ、実際に編集作業を担当する学校法人東海大学建学七十五周年記念誌編纂委員会の設置が決まりました。記念誌の編纂委員会があり、その下に編集委員会という構図です。

二〇一二（平成二十四）年五月の記念誌編纂委員会では、学園史資料センターが記念誌作成に当たることが正式に決定されました。そして二〇一三（平成二十五）年四月一日付けで編集委員会が発足致しました。学内の教員を中心にした編集委員会が発足し、『七十五年史』編纂の実質的な作業がスタート致しました。

続いて二〇一四（平成二十六）年六月十日、親会である記念事業委員会で、記念誌の名称が『東海大学七十五年史』と決まりました。それを受けて、編集委員会の名称も東海大学七十五年史編集委員会と正式に決められます。その前は建学七十五年記念誌編集委員会と仮称でした。この東海大学七十五年史編集委員会のメンバーには、学園の教育機関に所属する教員十四名が選定されました。この編集委員のほか執筆委員というのがありますが、この話は後ほどさせていただきます。話を戻して、編集委員十四名には、前回の『五十年史』の編集委員であった二名が含まれています。前回の年史を経験された先生がお二人いるということで、編纂の作業をしていく中で大変有益なご助言をいただくことができました。

事務局も学園史資料センターが担うということになりました。な

お、学園史資料センターは、常勤スタッフ五名、非常勤のアルバイト八名の現在十三名で構成されております。総括者として、私が主任を務めております。

二〇一三（平成二十五）年六月に第一回編集委員会が行われました。編集委員の方々、そして総長と副総長にも参加していただき、辞令の交付を正式に行いました。この時、総長から「東海大学の歴史は、先駆けの歴史」である。その特徴を記念誌で表現してほしい。本学園は教育研究機関が幼稚園から大学院まで、また日本全国から海外まで、縦にも横にも広がった大きな組織、膨大な資料を集めるだけでも大変な作業になると思うが努力をお願いしたい」というコメントをいただきました。続いて副総長からも「関係者の自己満足や本棚の肥やしで終わることなく、一般の人にも日ごろ手に取って使ってもらえるような、見やすく、読み易い記念誌であるとし、将来のデジタル技術の進歩も考慮しながら、次の百周年記念誌の編纂にも繋がるものにしてほしい」と言っていたいただきました。ここで強調しておきたいのは、この時点ですでに「次の百周年記念誌」という言葉が明示されていることです。

編集委員会の開催に合わせまして、研究会も開催するようになりました。具体的な内容は、①『東海大学五十年史』等学園関連書籍の輪読、②各執筆委員からの研究報告、進捗状況の報告、③学園史資料の収集状況についての報告、④学園関係者の講演および研修（学園教育機関の視察等）の四点です。この研究会は、結果的には二〇一三（平成二十五）年の第一回から二〇一八（平成三十）年の刊行が終了するまで通算三十三回開かれました。年に五、六回、二

カ月に一回、一堂に会して委員会を開いておりました。

本学には北海道から九州までキャンパスが7カ所ありますが、それぞれ研修ということで現地に赴き、関係者にお話をうかがう機会も設けました。たとえば、二〇一六（平成二十八）年二月には、編集委員全員による熊本の研修旅行（一泊二日）を企画しました。熊本は本学の創立者である松前重義生誕の地であり、そこには校舎もあります。が、実際に現地に行って創立者の息吹や空気を実際に体感しようという趣旨の研修です。このときは松前重義記念館にて、生誕の地である嘉島町の町長（付属高校出身）にご講演をいただきました。ちなみにこの二カ月後に熊本地震が起きまして、松前重義記念館はもとより、地元の嘉島町も大変な被害を受けたということでした。あと、熊本訪問時には熊本大学の五高記念館も視察しました。熊本大学工学部の前身校が本学創立者の出身校だったものですから、委員の方々をお連れしてご案内しました。

それから関係者へのヒアリングも研究会で実施しました。たとえば、元学長など学内で要職を務めた方々を招いて、講演会やヒアリングをお願いしました。

先ほど編集委員会の説明で触れた執筆委員会についても述べておきます。執筆委員は厳密には編集委員十四名の中の六名のメンバーです。通史篇の原稿執筆に向けて、執筆委員による意見交換の場を設けようということで執筆委員会を開催しまして、編集委員長と副委員長も同席しました。二〇一四（平成二十六）年三月二十八日の第一回目以降、編集委員会と同じように二カ月に一回、交互に開催しました（執筆委員会は結局、二〇一三（平成二十五）年から二〇

一八（平成三十）年まで通算二十八回開催）。ですので、執筆委員の方にはほぼ毎月お集まりいただいております。また、執筆委員六名につきましては、作業時間ということで原則として週に一、二限の一コマ（二〇一七（平成二十九）年度までは一コマ九〇分間、二〇一八（平成三十）年度からは一コマ一〇〇分）を取っていただき、学園史資料センターの事務室の隣の編纂室にて、執筆作業や資料調査をお願いしました。

二、編集作業の展開

具体的な編纂作業において、まず大事なことは編集方針です。『七十五年史』を作成することは決まったわけですが、実際にどんなものをつくるかということを決めないとけませんでした。そこで編集委員会の中で議論を重ねまして、二〇一四（平成二十六）年六月十日、大きく三つの柱で定めた『七十五年史』の編集方針が記念誌編纂委員会で承認されました。

一本目の柱が正式名称についてです。『五十年史』に倣うということで、年史の名称を『東海大学七十五年史』とし、通史篇と部局篇で構成することが決まりました。

二本目の柱が編集方針ならびに執筆編集方針の策定です。まず編集方針案については、以下の七点が示されました。①『五十年史』の内容を再検証しながらその後の二十五年を中心に執筆すること、②図録と通史篇、部局篇の三冊を刊行すること、③通史篇は五〇〇ページ、部局篇は八〇〇ページ、図録は二〇〇ページ程度とし、構成は建学から五十年を二〇%、その後の二五年を七〇%、未来への

展望を一〇%とすること、④詳細年表や学部学科の変遷表などの資料集も別途作成すること、⑤デザイン、レイアウトを工夫して読みやすくすること、⑥IT技術やインターネットを活用したデジタル版の作成、⑦編纂資料を未来へ継承できる体制や組織づくりを推進すること、です。

次に執筆編集の方針案ですが、通史篇と部局篇それぞれ別に作成しております。まず通史篇の執筆編集方針案は大枠としては『五十年史』の編集方針案を継承しつつ、以下の四点が示されました。①建学の精神に基づき、先駆けの道を歩んできた学園の足跡をたどり、一〇〇周年に向けての方向づけを確かなものにする、②『五十年史』を再確認し、その後の二十五年の事象を中心に執筆、③学生・生徒や教職員の顔が見えるような叙述、④社会全体の動向を考慮しつつ、資料記録を駆使し科学的かつ体系的に執筆する、ということ です。

続いて部局篇の編集方針は以下の六点です。①部局ごとに幹事（担当者）を選出、②『五十年史』部局篇の記述を受け、その後の二十五年を中心に叙述、③各部局の年表を本文の後に掲載、④事務局が作成する下原稿と『五十年史』を参考に執筆する、⑤合併・改編された部局は現部局が執筆、⑥閉鎖された部局は事務局が執筆を担当するという事です。ここで私どもが部局と呼んでいるのは学部学科、付置研究所、付属諸校、付属研究・教育機関の全てです。そして、編集委員長、橋本委員長、沓澤副委員長が秋学期に各部局に直接説明する機会をつくろうという方針でした。

それから三本目の柱が『東海大学七十五年史編纂だより』（A4、

全八ページ、五、〇〇〇部)の刊行です。基本的には学外にお配りしたのですが、本当の目的は学内に周知する、今こういう編纂事業が行われているということとを共有して欲しいという意味合いを込めて作成した次第です。この『編纂だより』は実は『五十年史』の時も作成しており、それを踏襲したかたちです。最終的に第六号まで発行しました。

さらに具体的に申し上げます。まず図録についてです。二〇一七(平成二十九)年十一月四日に開催予定の建学七十五周年記念祝賀会において参列者に記念品と共に配布することになっておりました。そして、建学五十周年(一九九二(平成四)年)以降の二十五年間を中心に、学園の主役である「学生、生徒らの生き生きとした顔が伝わる」ことをコンセプトとし、「現代文明論」「海外研修航海」「学園オリンピック」といった、学園が先駆けて展開してきた特徴的な教育・研究活動の歴史について写真を中心に紹介しようという方針でした。

続いて通史篇ですが、文字通り通史ですので学園の創立者である松前重義について記す序章を含めて、学園の建学から現在(二〇一七(平成二十九)年十一月四日)までの歴史について、全体の流れを叙述するという方針です。

部局篇に関しては、大学の学部や短期大学、付属諸学校などの教育機関のほか、各種の付置研究機関、教育支援施設等について、それぞれの開設から現在(二〇一七(平成二十九)年十月三十一日)までの歴史を記していくという方針が定められました。

実際の編集にあたりましては、『五十年史』を踏襲するという大

枠は決まりましたので、実際に作業を進めていく時に事務局でまず取り組んだことは、『五十年史』の時の資料を洗い直すことでした。『五十年史』の編纂資料を幸い残していたのです。資料提供依頼や会合通知といった各部署への通達文書や『五十年史』の執筆方針などが当センターに保管されていましたので、それを紐解き、『五十年史』をもう一度見直しました。

それと併せて、『七十五年史』編纂のための資料調査を行いました。法人本部(理事長室、初等中等教育部、広報課ほか)や大学運営本部(学長室、高等教育室ほか)、大学広報部などの部署に編集委員長名の文書を通じて、編纂事業への協力および資料提供を依頼し、文書や写真等の複製収集および一部リスト化を致しました。

それから、建学七十五周年の記念展示会「東海大学七十五年 写真から見る七十五年の歩み」を当センターの主催で開催しました。建学七十五周年記念式典に合わせてキャンパス内で実施し、記念祝賀会の当日には会場内で展示を設営しました。展示内容は『図録 東海大学七十五年』の内容を再構成したもので、図録本の制作と同じコンセプトで作成したものです。

三、『東海大学七十五年史』の刊行

『七十五年史』刊行までの経緯についてそれぞれご紹介します。まず図録についてです。図録は二〇一三(平成二十五)年度から事務局で構成案を作成し、編集委員会で内容を検討しました。二〇一六(平成二十八)年度に入ってから、大まかな体裁や資料について検討しました。判型はA4判、製本は並製本(ソフトカバー)に

決定、同年五月に台割りを作成、ページ数も同年九月に決まりました。『五十年史』の時にも図録を作っていたので、もちろん参考にしましたが、今回は軽量でかつコンパクトにしようということで、ページ数は減らし、『五十年史』の後の二十五年を中心とした構成にしました。付録として東海大学の源流に関する総長の講話を冊子にして付けました。また、全国コンクールで金賞をとりました本学の吹奏楽部に建学の歌、校歌を演奏してもらって、それを音源としたCDも付けました。校正作業については二〇一七（平成二十九）年一月にテキスト原稿を、同年五月に資料、写真等を入稿して、校正を三校まで、二〇一七（平成二十九）年十月六日に校了、最終的な使用写真数は三三八点、二〇一七（平成二十九）年に一足先に図録が完成しました（製本版四、〇〇〇部、デジタル版八、〇〇〇部）。

次に通史篇についてです。まず構成と章立て、執筆担当を決めなければいけませんでしたが、二〇一三（平成二十五）年六月頃から六名の執筆委員の担当割りを始めました。二〇一五（平成二十七）年七月に通史篇の執筆要綱案を策定、以後数度の改定を加えましたが、これに則り、執筆を進めていきました。二〇一七（平成二十九）年十月三十一日を最終的な提出期限と定めまして、ちょうど一年前には原稿を提出してもらおうようお願いしました。提出いただいた原稿は逐次事務局で内容や表記統一を確認し、二〇一八（平成三十）年四月より整った原稿から逐次入稿しました。同年八月、全ての原稿の入稿が終わりました。

校正については、入稿前は事務局員とともに各編集委員にも校閲

を依頼しました。入稿後のゲラの段階でも編集委員に回し、法人本部や大学本部にも校閲をお願いしました。事務局がそれらを集約しましたが、製本とされる前に原稿を見ていただく機会を入れた次第です。これは部局篇も同じです。校正は三校まで行いまして、二〇一八（平成三十）年十二月二十八日に校了致しました。

最後に部局篇についてです。部局篇は二〇一四（平成二十六）年度から事務局で原稿サンプルを作成し、編集委員会場で書式や記述内容について検討しました。併せて立項する部局名の抽出作業と割り当てページ数の調整を進め、二〇一五（平成二十七）年六月十八日付けの編集委員会委員長名による文書で、各部局に幹事の選出を依頼しました。各部局における定期・不定期の刊行物の有無と提供も求めることとなりました。幹事と言っても、特に辞令は出ないのですが、各部局に一名連絡担当を設置するようお願いをしたわけです。教職員誰でも良いということをお願いし、異動があった場合には必ず後任を決めてもらうよう依頼もしました。

二〇一五（平成二十七）年七月十九日には、学園の十カ所をテレビ会議で繋ぎまして、幹事の方々に出席いただいて部局篇の説明会を行いました。幹事の方々には編集方針および部局篇の執筆要綱を配布するとともに、執筆内容についての質疑応答を実施しました。結果的に一堂に会した説明会は一回だけでしたが、十カ所をいっぺんに繋げたというのは減多にないそうで、施設担当の方も大変ご苦勞されたということでした。

部局篇の原稿については、当初は幹事の方に執筆をしてもらう予定だったのですが、結果的に一部の部局を除き、事務局が草稿を作

成し、各幹事に校閲をお願いするという方針に転換しました。あらかじめ想定したページ数の枠内で草稿を準備することになりましたので、かなりの時間と手間がかかりました。初等中等教育機関である付属高校以下の付属諸学校十九部局につきましては、現場の幹事の方に一から書いて欲しいとお願いしました。原稿の内容の統一性を調整するため、付属自由ヶ丘幼稚園の園長と付属相模高等学校の教諭・教頭補佐の二名の方を新たに編集委員に任命し、校正作業に加わってもらいました。

最終的には二〇一七（平成二十九）年四月一日時点の組織体制を基準として立項する部局を確定しました。加えて、『五十年史』刊行以降に廃止もしくは閉鎖された一部の部局も記録として残すべきと判断し、そうしたいいくつかの調整を経て、最終的に八十八部局が対象となりました。実はこの時に大変だったのは、二〇一五（平成二十七）年の幹部説明会の時と、編集が進む二〇一六（平成二十八）年度から二〇一七（平成二十九）年度にかけて、組織が変わってしまったことです。そのため新たにまた幹事を任命する必要があったので、この辺の連絡と調整がかなり大変でした。途中で幹事が知らない間に異動したということもありましたし、お一人亡くなった方もいらっしゃいました。なお、組織改編のあった部局については、適宜原稿のリライトを施すことで対処しました。

部局篇では記述内容の年代的下限を二〇一七（平成二十九）年十月三十一日に設定しました。次の日が七十五周年の建学記念日にあたるわけですが、それまでの内容の記述を幹事の方々には徹底しました。下限以降の出来事についても書き加えたいとおっしゃる幹事

の方もいたのですが、申し訳ございませんと、記述の下限についてご理解いただくようお願いしました。

二〇一八（平成三十）年二月九日以降、逐次入稿しまして、同年七月六日には八十八部局全ての入稿が完了致しました。校正についてですが、入稿前は事務局員のほか、各担当幹事にメールでお願いし、各編集委員にも校閲を依頼しました。入稿後のゲラは、通史篇と同じ各編集委員および法人本部（理事）、大学運営本部など複数個所に校閲をお願いして、それを事務局が集約しました。通史篇もそうでしたが五、六カ所にゲラを送りますので、それを集約する作業にかなりの手間が掛かりました。校正は三校まで行いまして、二〇一八（平成三十）年九月十二日の出張校正をもって部局篇は校了となりました。

通史篇、部局篇の刊行後、編集委員会が解散することになりました。二〇一八（平成三十）年十二月十二日に開催された第三十三回目の編集委員会をもって最後の委員会となりました。同年十二月三十一日付けで委員に任期満了を通知し、編集委員会も解散ということになりました。

そして、二〇一九（平成三十一）年二月九日に製本版の通史篇、部局篇が併せて納品されました。同年二月二十六日には全ての配布予定先への配布も完了し、事務局的には最後の仕事ということになりました。奥付は当初予定していた刊行日である二〇一八（平成三十）年十一月一日となっていますが、実際には年が明けてからの刊行となりました。

最終仕様についてです。通史篇（総ページ数一、〇〇六）、部局篇

(総ページ数一、三五四)は各六五〇部作りまして、学園内外の各機関、公共の図書館や文書館などに配布しました。元々、編集方針で決まっていた通り、デジタル版(DVD)も作りしました(八、〇〇〇部)。電子ブックとPDF形式で作成し、これも学園内各機関に配布しました。

おわりに

最後に回顧と展望ということで六点お話ししたいと思います。

まず、二〇一六(平成二十八)年四月に発生しました熊本地震です。阿蘇校舎に通う三名の学生が就寝中にアパートで亡くなり、阿蘇校舎自体も甚大な被害を受け、とても教育活動ができない状況となりました。まさに編集期間中の出来事であり、こうした事態を『七十五年史』の中でどう書くのか、イレギュラーな問題となりました。また、現地では復興の動きも進み、その動きも記録に残すため実際に調査に赴くこともありました。『七十五年史』はやはりオフィシャルな歴史書になりますので、被害の状況や復興をかなり慎重に書いた次第です。阿蘇校舎は農学部のみで広い農場があり、地元住民と非常に強い繋がりがありましたので、学生さんや現地の方々も学校の復旧を望んでいました。その一方で、学園の方針や国・県の考え方も絡み、復興の在り方の結論はなかなか出ませんでした。それをいかに原稿に反映させるかを、編集委員会ではかなり検討した次第です。こうした編集期間中に起きるイレギュラーかつデリケートな出来事をいかに取り扱うかは大きな問題です。

二点目は移転作業についてです。編集期間中、学園史資料セン

ターが三回移転しました。移転といっても事務局だけではなく、数万点、箱数にしたら五、六、〇〇〇箱の資料を全部移転しました。移転の影響は、資料の出納ができないという問題に現れました。移転によって、一旦箱に入れて平積み山積みしますので、いざという時に資料がすぐ出せなくなってしまうのです。通常でしたら十分くらいで出せるものが、一日かかったこともありました。偶然だったのですが、こういった移転作業が編集期間中に三度も起こったので本当に大変でした。せっかく整理して、この資料はここにあるよと頭にマップが入っていたのですが、三回の移転によって訳が分からなくなっていました。

三点目は、通史篇と部局篇の同時刊行についてです。通史篇と部局篇は書き方の体裁が違っていても事実関係を共有し、整合性を付ける必要がありました。当然、何年に何ができたとか、何年にこういうことがあったというのを、合わせる必要があります。ところが実際には両方の作業の進行が合わず、事務局の中でも意見調整がでなかった部分も多々あり、整合作業がなかなかうまくいきませんでした。結果的には完成しましたが、ミスが出てしまったのも事実です。刊行後、反省の意味も込めて間違えをチェックしたところ、付箋でハリネズミ状態になってしまいました。みつともないのですが、これをやっておかないと、今度の百年史の時に困るわけですから、百年史を担当された方々が、これを上手く反省してもらえればと思っています。

四点目は「資料篇」の役割と意義です。年史編纂に「資(史)料篇」を盛り込むか否か検討されましたが、今回は前回同様に資料篇

を作りませんでした。資料篇の編纂においては、収載するための資料の選別精査、読み込みといった作業が必要ですが、収載される資料は、厳選された良質かつ一級の基礎資料になるわけです。また、そうした資料を読み込んだ過程で醸成された知識やスキルが、通史篇執筆の役に立つため、資料集の編纂を通史篇の前に入れる必要性についても検討すべきだと思います。一方、資料センターでは東海大学資料叢書というかたちで、実際の資料を翻刻したものを掲載しており、直近で第七輯を刊行しました。これらが後に通史篇を書く時には生きてくることは間違いありません。

五点目の編纂終了後の後始末です。年史刊行でミッション完了にしたいところですが、やっぱり編纂過程で発生したあらゆるモノが出てきました。収集した資料や写真はもちろん、草稿からゲラに至る全ての原稿類、委員会開催に関わる各種通知や配布物、事務的な文書からメモ書きに至るまでの記録、メール等の日々の業務記録や取材した時の写真記録などは必ず整理しておくべきだと思います。たとえば、それらを「七十五年史編纂資料」の括りで、通常の資料整理作業と同様に資料番号を付け、目録化しておくことで、次の年史編纂事業に継承する必要があるかと思っています。今後の百年史のためにも、七十五年史で集めた資料も全部取っておくべきだと思います。その作業自体が編纂事業の総括になりますし、次の世代に引き継いでいくためのスタートとして、是非やるべきだと感じています。

六点目が『百年史』編纂への胎動です。本学園は二〇一七（平成二十九）年十一月一日、七十五周年目の建学記念日に『学園マス

タープラン』を策定、一〇〇年へ向けた指針として、「二〇一七年、学校法人東海大学は建学一〇〇周年に向けて、日本で、世界で、先駆けとなる新たな挑戦をスタートさせます」と明言しました。七十五年の歴史を基盤として二〇四二年の建学一〇〇周年を見据えた総合戦略が立てられ、来るべき『東海大学百年史』の編纂のための体制と基盤づくりが資料センターの新たな目標となっています。そのためには、『七十五年史』の間違いを真摯に見つめ直すこと、編纂業務で集めた資料の整理保管、目録化を編纂事業後も弛まず継続していくことが一番大事と考えています。

現在、学園内にある短期大学二校の募集停止がすでに決まっています。数年後に無くなってしまうわけですが、『百年史』にはこの無くなる短大の歴史を含めた、資料整理をこれからも弛まず続けていくべきと思っています。

今日最後にぜひ申し上げておきたいことがあります。中央学院大学教授の白水智さんの著書『古文書はいかに歴史を描くのか―フィールドワークがたぐく過去と未来―』（NHKブックス、二〇一五年刊）の中に、「史料整理は雑務なのか」という一節があり、資料整理の評価の低さが指摘されています。

資料整理は、一つ一つの資料を手にとって目録を作っていく、それを何十件、何百件と積み重ねていく地味な作業であります。こうした作業を研究者自身が雑務だと思っている。私も長年、自治体史に携わってきたので、このことを痛感しているのですが、資料目録を作ることを適度に評価していただきたいなと思っています。一点二点の面白い資料に注目して、トピックで紹介するのももちろ

ん大事なことです、やはり日々の資料整理というのを積み重ねていくことが重要だと思っています。

今回ご講演をお引き受けするにあたりまして、こちらの編纂室に二度お訪ねしたのですが、本当に資料整理をひたむきにやっているなという空気をひしひしと感じました。顧みられない作業かもしれないですが、それができるからこそ良い資料も見つけられるわけです。そういった作業を地道に重ねることで、『立正大学百五十年史』もきつと良い成果になるんじゃないかなと考えております。年史を作ることももちろん大事ですが、それを次の世代に残していくための営みもぜひ視野に入れたかたちで、基礎的な作業である資料整理を重要視してもらえたらと思います。駆け足ではございますけれども私の今回の報告を終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございます。

司会…椿田様ありがとうございます。大変詳しい内容で、写真も多用していただき、まるでドラマのように編纂の流れを理解できました。それでは質疑応答のお時間を取らせていただきます。ご質問のおありの方はいらっしゃいますでしょうか。

質問者…立正大学の石山（秀和）と申します。今日はありがとうございます。三点質問があります。一点目は、今回の『七十五年史』は『五十年史』をふまえて、その後の二十五年を中心に掲載したということなのですが、その前の五十年分は丸々リライトされたのでしょうか。二点目は、椿田さんを含めて

五名の編纂員が雇用されていますが、この根拠は何でしょうか。三点目は執筆委員についてです。執筆委員には日本史を専門としない方も含まれています、どうやって人選されたのでしょうか。よろしく願います。

椿田…一点目のご質問については、『七十五年史』を作る時に、『五十年史』があるのだから二十五年だけ書けば良いという意見も確かにありました。しかし、最終的にはやはり全部の時代を含めることになりました。『五十年史』の内容をチェックすると、間違いも多く、典拠がしっかりしていない場合も見られました。そのため編集委員会を重ねていく中で、『五十年史』を参考にしながら、その前の五十年も書き換えることになりました。確かにここ二十五年の記述が多めですが、七十五年全体のバランスを考えながらの構成となっています。

二点目のスタッフについてですが、そもそも編纂を機に雇用された訳ではなく、二〇〇四（平成十六）年に私が入職した時には、五名という陣容になっていた、ということです。今のスタッフ五名は全員、本学の卒業生です。私の専攻は日本史ですが、日本史のスタッフが三名、残り二名は広報学科の卒業生です。

三点目の執筆委員の人選ですが、これも私はよく分かりません。ご覧いただいた執筆委員の六名は、皆さん若く、四十代が中心です。創立者を知らない世代です。大島（宏）先生という方は立正学院で大学史に携わった経験をお持ちです。そのほかの先生方の大半は年史執筆が初めてかと思っています。これは個人の憶測ですが、次の一〇〇周年も見据えて選定されたのではないのでしょうか。実際に一〇〇周年といっても、編纂事業はその十年前ぐらいから動き出すわけで、その頃に年齢的に在籍しているであろう先生を対象として人選された

のかもしません。ちなみに、冒頭で申し上げたように、編集委員の二名の先生が『五十年史』を経験されており、そこでの執筆や編集で得たスキルが、今回の編集委員会でも有意義に働いたわけですので、そういった将来性を意識されての人選だったのではないのでしょうか。

質問者…今日は貴重なお話ありがとうございました。東京基督教大学の阿部（伊作）と申します。質問が二つほどありまして、一つはこの年史を出されるにあたっての資料収集で何か大変だったことがありましたら伺いたいと思います。もう一つは学校法人東海大学の文書規程の管理について、資料センタールのほうに文書が集まってくるシステムがどのようになっているのか、お話をいただける分で結構ですので教えていただければと思います。

椿田…まず学園内の資料収集は年史編纂の時が最大のチャンスです。通常なんでもない時に資料を出してと言ってもほとんど対応してくれないですが、年史編纂が学園の事業として位置づけられることで、私どもにとっては動き易い状況となりました。ただし、各組織の方々にご理解いただくために何度もお伺いをして、今回の編纂事業の協力のうえお見せいただけないかというステップが大変でした。

また、法人本部などに資料を見たいとお願いした時に借り出しができないので、現地で確認、写真撮影にて収集することになりました。その作業は大変でしたが、一つ一つ写真を撮り、ついでにそのリストを作ることで、先方が喜んでくれることもありました。さらに、必要な資料を残す、うかつに捨てないという意識が生まれ、文書資料管理の予防線になったのではないかとも思っています。

二つ目のご質問は学内の資料を規程に基づいて集めているかということですね。私どもの資料センターの規程では、法人の資料を集めて良いことになっています。規程にあるので、働きかければ収集は可能ですが、実際には現場での管理の仕方と私どもの作業工程が噛み合わないこともありました。こちらとしては規程を盾にして、うちにはこういう規程があつて文書を集めて良いことになっているので必ず提出して下さいと言っています。

国公立のように公文書のリストと共に資料が保管されているシステムはなく、本学ではそれぞれの部署で独自で資料を持っています。一応は保存規程に則っているはずですが、出して欲しいといってもなかなか手くいかない部分があります。もどかしいですが、実際にその規程通りに則って資料全部が提出されても、とても対応ができるわけでもなく、そこにはジレンマが常にあります。

質問者…早稲田大学史資料センターの北浦（康孝）と申します。本日はどうもありがとうございます。一番印象に残ったのが『百年史』を念頭に活動されているということ。たとえば、刊行後に誤りをチェックするというのは非常に参考になりました。

さて、今回の年史の中心は『五十年史』の後ということで、大学設置基準大綱化のちょうど後の時期ですね。熊本の阿蘇校舎の被災の話もそうですが、同時代史として歴史的評価が定まっていなない難しさもあったかと思いますが、とりわけ、大綱化以降で大学の諸々の組織や部局がそれまでの何倍ものスピードで変化していると思います。そのうえで、構成や章立てにおいてご苦労もあったかと思いますが、その点についてお話ししていただければと思います。

椿田：確かに仰られたように、中心になるべき二十五年分の歴史の中でどうしても外せないトピックはたくさんありますので、むしろこの二十五年間分の方が大変だろうという話は常々しておりました。一九九一（平成三）年の大学設置基準大綱化以降の変化については、編集委員会でももちろん検討し、特に自己点検や第三者評価をどう盛り込むかといった議論もありました。

また、二〇〇八（平成二十）年に本学は大学の統合をしています。九州東海大学と北海道東海大学を東海大学一つに統合する大きな改革でしたが、これをどう記録として残すのか、検討しました。資料を元にして書くことを大原則にしておりましたので、公式見解として大学が出している報告書などを資料に執筆しました。三大学統合をめぐるのは侃々諤々であり、その過程での検討資料もたくさんあるのですが、書けない部分も多く、結果しか書かないという割り切り方はどうしても必要でした。また、『百年史』を念頭に置くので、内容として十分かについては後の評価を待ちたいと思いますが、表に出して良い資料かについては、事務局と各委員とで常に点検しました。そういった事情もふまえて、妥協した書き方をしたところも正直ありました。

章立てもいくつか候補がありました。編集方針が決まった時に大枠の章立てを作りましたが、検討を重ねるごとにコロコロと変わり、最終的には今のかたちになりました。執筆担当は変わらなかったですが、いろいろと検討する中で、タイトルや内容、書き方が変わったこともあります。年史編纂という作業の性格上致しかたないことですが、資料の読み込みが進んでくると、こう書いたほうが良いというのも当然出てきましたが、それを委員会で調整するのが大変でした。

司会：質問も尽きないかと思いますが、お時間となっていました。最後

に椿田様にもう一度盛大な拍手をお送りいただければと思います。以上をもちまして第六回立正大学史料編纂室主催講習会を終了させていただきます。皆様どうもありがとうございました。

第6回立正大学史料編纂室主催講習会

令和元年7月5日

『東海大学七十五年史』の編纂を終えて ～編纂、刊行、そしてこれから～

学校法人東海大学学園史資料センター 椿田卓士

I. はじめに

- ・平成30(2017)年11月1日の建学記念日…建学75周年目

※昭和17(1942)年12月8日、法人認可。翌年静岡県清水市(当時)に「航空科学専門学校」を開校
→東海大学の原点

- ・これまでの年史編纂

①『回顧と前進 東海大学建学の記』(1963年刊、創立20周年)

②『前進する東海大学』(1967年刊、創立25周年)

③『三十年の歩み』(1972年刊、創立30周年)

※刊行後の1973年に設置された「資料室」が当センターの前身

④『東海大学建学史』(1982年刊、創立40周年)

⑤『東海大学五十年史』(通史篇、部局篇、図録)(1993年刊、創立50周年)

- ・学園史資料センターの概要

→平成15(2003)年4月法人直轄機関として設置。建学から今日までの学園史資料の収集・整理・公開に携わる。常勤スタッフ5名、非常勤アルバイト8名(2019年度現在)。場所は東海大学湘南校舎5号館。

※「学校法人東海大学組織及び業務分掌規程」(抜粋)

第14節 学園史資料センター

第91条 学園史資料センターにおいては、次の事項をつかさどる。

- (1) この法人の記録及び資(史)料物の収集、整理、保管に関すること。
- (2) この法人の業務に関する記録、資料の収集、整理、保管に関すること。
- (3) この法人内の業務に伴う前各号の資料等の閲覧、貸与等に関すること。
- (4) この法人内外に対する、第1号、第2号の資料等の公開に関すること。
- (5) 法人年鑑、年史の編纂及び作成に関すること。
- (6) その他必要と認められること

II. 七十五年史編纂事業の組織体制 (〔資料1参照〕)

○編纂体制の整備

平成23(2011)年1月6日 「学校法人東海大学建学75周年記念事業委員会」が発足。

平成24(2012)年4月1日 「学校法人東海大学建学75周年記念事業募金委員会」と
「学校法人東海大学建学75周年記念誌編纂委員会」が発足。

- 平成 24 (2012) 年 5 月 記念誌編纂委員会において、記念誌作成を学園史資料センターが担うことが正式に決定。
- 平成 25 (2013) 年 4 月 1 日 編集委員会が正式に発足。
- 平成 26 (2014) 年 6 月 10 日 記念事業委員会において、記念誌の名称を『東海大学七十五年史』とすることが正式に決定。

○編集委員会

- ・「東海大学七十五年史編集委員会」…学園の教育機関に所属する教員 14 名で構成。ほかに学園の教職員から選ばれた 5 名が顧問として委員会の活動を支援した。

※編集委員 14 名の内、2 名は『東海大学五十年史』編纂時も編集委員。

平成 25 (2013) 年 6 月 19 日 第 1 回編集委員会開催

→総長挨拶「東海大学の歴史は“先駆けの歴史”。その特徴を記念誌で表現してほしい。本学園は教育・研究機関が幼稚園から大学院まで、また日本全国から海外まで、縦にも横にも広がった大きな組織。膨大な資料を集めるだけでも大変な作業になると思うが、努力をお願いしたい」(『東海大学七十五年史編纂だより』第 1 号)

→副総長挨拶「関係者の自己満足や、本棚の肥やしで終わることなく、一般の人にも日ごろ手にとって使ってもらえるような、見やすく、読みやすい記念誌であってほしい。将来のデジタル技術の進歩も考慮しながら、次の 100 周年記念誌の編纂にもつながるものにしてほしい」(『同前』同号)

- ・研究会…編集委員会とあわせて逐次開催。

- ①『東海大学五十年史』等、学園関連書籍の輪読
- ②各執筆委員からの研究報告、進捗状況の報告
- ③学園史資料の収集状況についての報告
- ④学園関係者の講演および研修（学園教育機関の視察等）

※編集委員会の開催数は、2013～2018 年の間で通算 33 回。

○執筆委員会

平成 26 (2014) 年 3 月 28 日 第 1 回執筆委員会開催

→編集委員の中から、「通史篇」の本文執筆を担当する 6 名の執筆委員を中心とする会合を初めて開催（便宜上「執筆委員会」と呼称。編集委員長・同副委員長も出席）。

- ・委員会の開催…2014 年度以降は原則、編集委員会を 2 カ月に 1 回、執筆委員会を 2 カ月に 1 回、交互に開催（執筆委員の 6 名は毎月顔を合わせる）。
- ・作業時間…執筆委員は原則として週に 1 時限を設定

※執筆委員会の開催数は、2013～2018 年の間で通算 28 回。

Ⅲ. 編纂作業の展開

○『東海大学七十五年史』編集方針の策定

→平成 26 (2014) 年 6 月 10 日、記念誌編纂委員会において『東海大学七十五年史』の編集方針が提示された（【資料 2 参照】）。

1. 記念誌＝年史の正式名称について
2. 編纂方針ならびに編集・執筆方針の策定について
3. 『東海大学七十五年史編纂だより』の刊行

1) 図録

- ・平成 29 (2017) 年 11 月 4 日開催予定の建学 75 周年記念式典において、参列者に記念品とともに配布する。
- ・建学 50 周年 (1992 年) 以降の 25 年間を中心に、学園の主役である「学生、生徒らの生き生きとした顔が伝わる」ことをコンセプトとし、「現代文明論」「海外研修航海」「学園オリンピック」といった学園が他に先駆けて展開してきた特徴的な教育・研究活動の歴史を、写真を多用して紹介する。

2) 通史編

- ・学園の創立者である松前重義について記す序章を含め、学園の建学から現在 (2017 年 11 月 4 日) までの歴史について、全体の流れを叙述する。

3) 部局編

- ・大学の学部や短期大学部、付属諸学校などの教育機関の他、各種の付置研究機関や教育支援施設等について、それぞれの開設から現在 (2017 年 10 月 31 日) までの歴史を個別に記す。

○『五十年史』(1993年刊行) 編纂資料の再チェック

- ・前例として、『五十年史』の内容検証とともに、事務局 (旧「50 年史編纂室」) 資料や当時の編集委員会資料・作業行程表・執筆要項といった過去の編纂関連資料を確認した。

○七十五年史編纂のための資料調査および収集

- ・法人本部 (理事長室、初等中等教育部、広報課他)、大学運営本部 (学長室・高等教育室他)、大学広報部など→編纂事業への協力および資料提供を依頼する文書を通じて、文書や写真等の複製収集および一部リスト化を実施した。

○周年事業に関わる展示業務

- ・建学 75 周年記念企画展として、「東海大学 75 年 写真から見る 75 年の歩み」を当センター主催にて開催 (場所：東海大学湘南キャンパス 4 号館 1 階通路 2017 年 10 月 31 日～11 月 3 日)。
- ・同内容の展示を、建学 75 周年記念祝賀会 (場所：東海大学校友会館 2017 年 11 月 4 日) の会場においても開催。

※上記展示内容は、『図録 東海大学 75 年』に収載した写真資料を再構成したもの。

IV. 『東海大学七十五年史』の刊行

1) 『図録 東海大学75年』

- ・平成 27 (2015) 年度より事務局が構成案を作成。編集委員会の場で数度にわたり内容を検討した。
- ・平成 28 (2016) 年度に入って、大まかな体裁や仕様について検討。判型は A4 判、製本は並製本 (ソフトカバー) に決定。同年 5 月には台割りを作成、頁数決定は同年 9 月。
- ・構成案については、事前に大学内の各部署にヒアリングを実施し、意見事項を調整した。
- ・平成 29 (2017) 年 1 月、テキスト原稿を入稿。同年 5 月に素材写真等を入稿。
- ・校正は三校まで実施。平成 29 (2017) 年 10 月 6 日校了。最終的な使用写真数は 338 点。

2) 『通史篇』

- ・構成および章立て案と執筆担当の策定 (2013 年 6 月～)、執筆担当割の決定 (2014 年 6 月)

を経つつ、各執筆委員（6名）による原稿執筆が進められた。

- ・平成 27（2015）年 7 月に通史篇の執筆要項案を策定、以後数度の改訂が加えられた。
- ・平成 29（2017）年 10 月 31 日を最終的な原稿提出期限とした。提出後は事務局にて内容や表記統一等原稿確認を施し、平成 30（2018）年 4 月より整った原稿から逐次入稿。同年 8 月、すべての原稿入稿を完了した。
- ・校正は、入稿前は事務局員の他、各編集委員に校閲を依頼。入稿後のゲラは各編集委員および法人本部（理事）・大学運営本部等複数箇所に校閲を依頼し、事務局がそれらを集約した。
- ・校正は三校まで実施。平成 30（2018）年 12 月 28 日の出張校正をもって校了した。

3)『部局篇』

- ・平成 26（2014）年度より事務局にて原稿サンプルを作成し、編集委員会場で書式や記述内容について検討。あわせて、立項する部局名の抽出作業と割当頁数の調整を進めた。
- ・平成 27（2015）年 6 月 18 日付の編集委員会委員長名による文書をもって、各部局に対して「幹事」（1 名）の選出を依頼。あわせて、各部局における定期・不定期の刊行物の有無と提供を依頼した。

※「幹事」…編集作業の窓口的役割。各部局より教員・職員を問わず選出。選出は各部局に一任した。
編纂期間中に異動があった場合は後任者の選出を依頼。

- ・平成 27（2015）年 7 月 29 日、湘南の他札幌・高輪・代々木・伊勢原・清水・静岡・福岡・熊本・阿蘇の各校舎 10 カ所をテレビ会議システムで繋ぎ、出席「幹事」を一堂に集めて部局篇についての説明会を開催。編集方針および部局篇の執筆要項を配布した。
- ・原稿については、当初の予定を変更し、一部の部局（初等中等教育機関）を除いて、事務局にてあらかじめ草稿を準備し、各幹事に配布して校閲を依頼する方向で進めた。

※初等中等教育機関である付属高校以下の付属諸学校（19 部局）の原稿は、草稿段階から各学校に執筆・校正を依頼した。

※平成 28（2016）年 11 月 1 日付で、編集委員 2 名（付属自由ヶ丘幼稚園園長、付属相模高等学校教諭・教頭補佐）を新たに加えた。

- ・最終的には、平成 29（2017）年 4 月 1 日時点の部局を基準として、立項する部局を確定。加えて、『五十年史』刊行以降廃止もしくは閉鎖された一部の部局も立項した（計 88 部局）。
- ※平成 28（2016）年度・同 29（2017）年度にかけて組織変更のあった一部の部局については、適宜原稿のリライトを施すことで対処した。

- ・記述内容の年代的下限は、最終的に平成 29（2017）年 10 月 31 日までとした。
- ・平成 30（2018）年 2 月 9 日に第一次入稿、同年 7 月 6 日に 88 部局すべての原稿を入稿。
- ・校正は、入稿前は事務局員の他、各担当幹事・各編集委員に校閲を依頼。入稿後のゲラは各編集委員および法人本部（理事）・大学運営本部等複数箇所に校閲を依頼し、事務局がそれらを集約した。
- ・校正は三校まで実施。平成 30（2018）年 9 月 12 日の出張校正をもって校了した。

○委員会の解散

- ・平成 30（2018）年 12 月 12 日の第 33 回編集委員会において、この会合をもって最終の委員会とし、あわせて同年 12 月 31 日付で各委員の任期が満了することが報告された。

○納品、配布

- ・平成 31（2019）年 2 月 9 日、通史篇・部局篇納品（各 650 部）。同年同月 26 日、すべての

配布予定先への配布終了。

○最終仕様

『東海大学七十五年史』 2018年11月1日発行（2019年1月末完成）

通史篇	A5判 (函入り)	口絵カラー18頁、本文モノクロ965頁 (総頁数1,006頁＋折込3)	650部	2冊セットで学園内外の各機関、公共の図書館や文書館等に配布。
部局篇	A5判 (函入り)	本文モノクロ1,335頁（総頁数1,354頁＋折込3）	650部	
デジタル版	DVD-ROM	通史篇・部局篇を電子ブックとPDFの2形式で収録。書籍版でモノクロだった写真もカラー掲載。本文等から文字列検索が可能。	500部	主に学園内各機関に配布。

『図録 東海大学75年』 2017年11月1日発行

図録	A4判	本文カラー75頁（総頁数78頁＋折込2）	4,000部	記念祝賀会出席者に配布。学園内外の各機関、公共図書館等にも配布。
デジタル版	DVD-ROM	『図録 東海大学75年』と「東海大学建学の思想とその源泉」を電子ブックとPDFの2形式で収録。吹奏楽研究会の演奏を収録したCDとの2枚組。	8,000部	建学75周年記念事業募金の寄付者に配布。

V. おわりに

○回顧と展望

①熊本地震の発生（2016年4月）

平成 28（2016）年 4 月に発生した熊本地震により、阿蘇校舎の学生 3 名が亡くなった他、同校舎も甚大な被害をうけた。

→発生間もない災害記録のため、『七十五年史』における取り扱い方を慎重に検討。

②移転作業

編纂期間中である平成 27（2015）年 10 月（同窓会館→5 号館）、平成 29（2017）年 7 月（5 号館→G 棟）、平成 30（2018）年 3 月（G 棟→5 号館〔現在地〕）の三度にわたって当センターの移転が実施された。

→同一キャンパス内とはいえ、保管資料を含めた全体移転であったため、移転前後は編纂作業はもとより通常業務における資料の出納に著しい支障が生じた。

③『通史篇』と『部局篇』の同時刊行

両篇における事実関係等の記述内容は、整合性と統一性がとれていることが絶対条件。

→両篇の作業進捗行程のズレとあわせて、事務局担当者間における相互の連携および意見調整の不徹底もあって、整合作業が不十分のまま刊行。結果的に事実の食い違いが多く確認された。

④「資料編」の役割と意義

年史編纂において、いわゆる「資（史）料編」を盛り込むか否か。

→資料編の編纂においては、収載するための資料の選別精査、読み込みといった作業が必須。

収載される資料は、厳選された良質かつ一級の基礎資料である。その編纂過程で醸成された知識やスキルは、おのずから後の通史編執筆にも大きく反映されていく。

⑤編纂終了後の後始末

年史は刊行すればそれで終わり、ではない。編纂過程で発生したあらゆるモノ（収集した写真や資料はもちろんのこと、草稿からゲラに至るすべての原稿類、委員会開催に関わる各種通知や配布物、事務的な文書からメモ書きに至るまでの記録、メール等日々の業務記録、写真記録等…）を整理すること！

→それらも「七十五年史編纂資料」の括りで、通常の資料整理作業と同様に資料No.を付し、目録化しておくことで、次の年史編纂事業のために継承できるようにする。編纂事業を一過性のものではなく、むしろ資料を遺す好機と捉えるべき。その作業自体が、編纂事業の総括になると同時に、次代へ引き継ぐための資産となる筈。

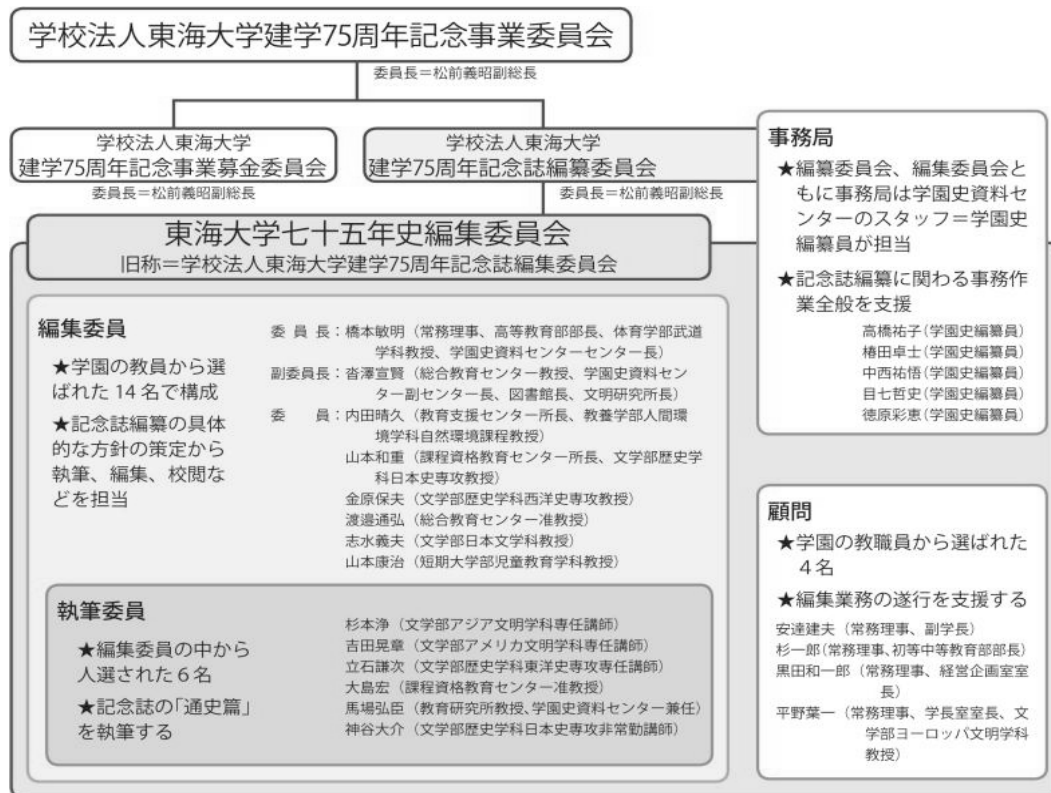
⑥「100年史」編纂への胎動

- ・「2017 年、学校法人東海大学は建学 100 周年に向けて、日本で、世界で、先駆けとなる新たな挑戦へのスタートを切ります。」（『学園マスタープラン』2017.11.1）
- 基盤となる資料を如何に集めて蓄積し、次代に継承していくかが、当センターにおける今後の 25 年間の大きな課題。そのためのもっとも基礎的かつ必要な作業である「資料の目録化」を、編纂終了後も弛まず継続していくことが重要である。

以 上



【資料1】『七十五年史』編纂体制（2014年）



※刊行終了時（2018年11月1日）の編集委員は15名、顧問は7名。

【資料2】『七十五年史』編集方針

〔編集方針〕

1. 記念誌＝年史の正式名称について

編集委員会案：『東海大学七十五年史』通史編・部局編
理 由：『東海大学五十年史』に倣う

2. 編纂方針ならびに編集・執筆方針の策定について

1) 編纂方針案

1. 『五十年史』の内容を再確認しながら、その後の25年を中心に執筆
2. 図録（2017年11月1日刊）と通史編・部局編（2018年11月1日刊）の3冊刊行
3. 通史編は500ページ、部局編は800ページ、図録は200ページ程度
※構成比率 ①建学～50年＝20%②その後の25年＝70%③未来への展望＝10%
4. 詳細年表や学部学科の変遷表などの資料集は別途、順次刊行
5. 通史編は全編カラーとし、デザイン、レイアウトを工夫し読みやすくする
6. IT技術やインターネットを活用したデジタル版も制作
7. 編纂資料を未来へ継承できる体制や組織作りを推進

2) 執筆・編集方針案

I. 通史編執筆・編集方針案

※『五十年史』の編集方針案を継承しつつ、新たに策定

- 一、建学の精神に基づき、先駆けの道を歩んできた学園の足跡をたどり、100周年に向けての方向づけを確かなものとする
- 二、『五十年史』を再確認し、その後の25年の事象を中心に叙述
- 三、学生・生徒や教職員の顔が見えるような叙述
- 四、社会全体の動向を考慮しつつ、資料・記録を駆使し、科学的かつ体系的に叙述

II. 部局編執筆・編集方針案

1. 各部局ごとに幹事＝執筆者を選出
2. 『五十年史』部局編の記述を受け、その後の25年を中心に執筆
3. 各部局の年表を本文の後に掲載
4. 事務局が作成する下原稿と『五十年史』を参考に執筆する
5. 合併、改編された部局は現部局が執筆
6. 閉鎖された部局は事務局が執筆

※部局＝学部学科、付置研究所、付属諸校、付属研究・教育機関

※編集委員会の橋本委員長、沓澤副委員長が秋学期に各部局に直接説明する

3. 『東海大学七十五年史編纂だより』の刊行

サイズ：A4 全8頁 部数：2000 配布先：学園内外の教育機関

（2014.6.10.「記念誌編纂委員会」配布資料より抜粋）

高村弘毅名誉教授 オーラル・ヒストリー

【概要】

実施日…二〇一九（令和元）年七月一日

（補足調査…同年十一月五日、於…高村名誉教授宅）

場所…立正大学役員応接室

聞き手・編集…本岡拓哉（大学史料編纂課）



【高村弘毅名誉教授 略歴】

一九三七（昭和一二）年 青森県五戸町生まれ

一九五六（昭和三一）年 立正大学文学部地理学科入学

一九六〇（昭和三五）年 立正大学文学部地理学科卒業

立正大学大学院文学研究科地理学専攻修士課程入学

立正大学文学部地理学科副手

立正大学大学院文学研究科地理学専攻修士課程修了

立正大学大学院文学研究科地理学専攻博士課程入学

立正大学文学部地理学科助手（自然系）

立正大学大学院文学研究科地理学専攻博士課程研究指導修了満期退学

立正大学文学部専任講師、立正大学短期大学部専任講師

立正大学文学部専任講師、立正大学短期大学部専任講師

立正大学文学部専任講師、立正大学短期大学部専任講師

立正大学文学部専任講師、立正大学短期大学部専任講師

立正大学文学部専任講師、立正大学短期大学部専任講師

立正大学短期大学部助教授（自然系）

立正大学文学部助教授

立正大学文学部教授

立正大学文学部専任講師

立正大学学生部長

一九八九（平成 元）年 立正大学文学部長
 一九九八（平成一〇）年 立正大学地球環境科学部教授
 二〇〇一（平成一三）年 立正大学地球環境科学部学部長
 二〇〇四（平成一六）年 第二九・三〇代立正大学学長
 二〇〇九（平成二一）年 立正大学校友会会長
 二〇一〇（平成二二）年 立正大学名誉教授
 現在に至る

立正大学への入学

——先生と立正大学との関わり合いはもう六〇年以上ですね。二〇〇四（平成一六）年から二期六年にわたり、本学の学長もお務めになられ、高村先生のご経歴と立正大学の歴史はかなりの時間が一致するわけですね。本日は特に立正大学と先生の関わり、海外調査について、そして一九八九（平成元）年に行われた、立正大学と中国の新疆大学との共同シルクロード踏査隊に関してお話を聞かせ願えればと考えております。それではまず、高村先生が立正大学に入られたきっかけについてお聞きます。立正大学文学部地理学科への進学の原因や経緯をお聞かせください。

高村 私は青森県立三本木高校の出身です。三本木高校では、東京理科大学を卒業された小友先生から生物と地学を教わり、日本大学を出られた新戸部芳先生から地理を教わりました。この両先生の教

え方が本当に良かったのです。それと、地理の授業では、当時、社会的にも有名な田中啓爾先生の教科書を使って勉強しており、それを私は非常に気に入っていました。それもあって、地理の成績がかなり良かった。東奥日報社主催で高等学校対象の一斉テストを年に二回ぐらいいやっていたと記憶しますが、いずれも上位の成績でした。良い成績をとれば名前が廊下に貼られるんですよ。あと、『傾向と対策』で有名な旺文社主催の一斉テストでも二―三番目ぐらいの成績のときもありました。

そして、大学進学にあたり、田中啓爾先生から地理学を学びたいと思いました。私は大学を選ぶのではなく、先生から選んだのです。当時、そんな受験生はまづいなかったでしょうね。それに立正大学は当時から地理学と歴史学において、東京教育大学（現在の筑波大学）や東京学芸大学、広島大学に匹敵するぐらい有名だったわけですし、地理の新戸部先生も「あなたは田中先生がいらっしゃる立正大学に行かれたらいいのではないですか」と強力に推挙してくれました。あと、これは入学が決まった後に知ることになったのですが、三本木高校で地学を教わった小友先生の叔父にあたる方が立正の職員にいたのです。それがその後、庶務部長を務めた武越慈寛さんでした。たまたまそういう人間関係もありました。

武越さんは当時、古い鉄筋コンクリート三階建の旧一号館地下室で管理人としてもご家族と一緒に居住していました。小友先生から「立正に私の叔父さんがいるから挨拶しなさい」ということで、一九五六（昭和三一）年四月の入学後すぐに会いに行きました。人のつながりっていうのはおもしろいもんですね、武越さんの立正大学

の学生時代の後輩であった佐々木さんという方が明電舎で係長をやっていたのです。私は貧乏人だったし、田中先生を訪ねて大学に入った変わり者ということもあり、その方をご紹介していただいたわけです。その縁があつて、私は入学後、昼に明電舎の仕事をすることにもなりました。

当時の立正大学に地理学科は夜（Ⅱ部）しかありませんでした。そのため、一、二年生（一九五六、五七年度）は夜間に通っていました。明電舎は大学に近い大崎駅前、今の高層ビル群（ThinkPark）にあり、通うのに都合だったのです。仕事は主に巨大な回転機（モーター）や変圧器の錆び落としとペンキ塗りでした。体中錆びまみれ、ペンキで泥んこになっているので、仕事終わりに風呂に入るんです。当時の風呂もひどくてね。電気風呂だったので、下手にそばに行くとピリピリくるんです。

——先生の最初の職歴に書かれている明電舎臨時社員の時のお話ですね。

高村 そうです。ただ、この仕事は朝の八時半からでしょう。その前には牛乳配達や新聞配達のアルバイトもしていた。それが終わったら、明電舎で働き、夜は立正で学び、中野区鷺宮一ノ一の下宿に帰るときはもう真夜中ですよ。

——ご飯を食べる暇もないですね。

高村 ご飯なんてのんびりできないですよ。ほとんど自炊だしね。おにぎりを持ってきて、勤務していました。私生活はそういう状況だった。そのときはお金がないからとにかくアルバイトを一生懸命やって、結局六〇万円を貯めました。そのお金のおかげで、試験管やphを測定するための比色管など卒業研究のための機材も購入できましたけどね。また、そのお金はのちの大学の負債期に銀行の担保にもなりました。

——そして一九五七（昭和三二）年、地理学科にⅠ部が増設され、高村先生は翌年、三年時にⅠ部に転籍され、夜間から昼間に学ばれることになりました。それでは、大学での学びについてお聞きしたいと思います。田中啓爾先生をはじめ立正大学地理学科の教育はいかがでしたか。

高村 田中先生は「地理学研究法」の講義の中で、『地理学の本質と原理』（古今書院、一九四九年発刊）や『塩および魚の移入路―鉄道開通前の内陸交通―』（古今書院、一九五七年発刊）などのご著書を踏まえて、授業を行われていました。あと、「立正地理―二人の侍」と呼ばれた、山口貞雄さん（当時、東京学芸大学助教授、のち同教授）や稲永幸男さん（当時、日本電信電話公社経営調査室、のち立正大学教授）、服部銈二郎さん（当時、都立高校教師、のち立正大学教授）をはじめ旧制立正大学の地理学科の教え子の方々の研究や、彼らとの共同研究の成果である『地理的総合研究―川崎市と東京江東地区―』（古今書院、一九五八年発刊）の内容もよく話され



写真1：秦野巡検での田中啓爾先生、左端帽子着用が学部3年時の高村名誉教授（1958年）
出典：高村弘毅『私の履歴書』2010年

ておりました。ここでは、文化扇状地に関して、そして地理的現象の発達段階を示す「初象、顕象、残象」といった田中先生独自の概念について学びました。さらに、神奈川県西部の秦野盆地（タバコ・花卉栽培）など、巡検（野外実習）にも何度か連れて行ってもらいましたが、そこで地理的な見方を教わることもできました。

そして、田中啓爾先生はもちろん、当時、東京教育大学におられた尾留川正平先生や青野壽郎先生、石川（三野）与吉先生（それぞれ後に立正大学教授）、気候学の関口武先生など、兼任教授として講義にいられていた先生方から学べたことは大いに満足でした。なにせ東京教育大学の学生と同じように教わったわけですからね。これはⅡ部であったからこそなのでしょうね。

ちなみにⅠ部ができるまでは地理学科に研究室というのはほとんどありませんでした。それが本格的にできるのは、一九五五（昭和

三〇）年に開設された修士課程が本格的に動き出してからだと思います。当時、田中先生、山口鎌次先生、富士徳治郎先生、福宿光一先生、それから榊田一二先生や大村肇先生、岡本兼佳先生、そういう方々が揃っていました。研究室を急いで作ったこともあり、鉄筋の旧一号館三階の二つの部屋にそれぞれ机を三つ横に並べるようにして、それを先生方が共有していたんですよ。

——高村先生はその後、大学院に進学するわけですが、研究者になろうと思うきっかけは何だったのでしょうか。

高村 大学に入るときには高校の教員になろうと思っていました。だけど、昼に地理学科が開かれ、修士課程も設置されたでしょう。専任の先生がようやく落ち着き、新しい先生が来られ、研究に熱が入ってくるわけです。そんな中、修士課程、そして博士課程に入ったわけです。私は地理学科の博士課程（一九六三（昭和三八）年開設）の第一号でした。

当時、文学研究科博士課程には日比宣正さん（元仏教学部教授）と入学しました。幸いにも立正大学の奨学金を二人でもらうことになりました。でも貧乏でしたからね、文部省の奨学金や県の奨学金をことあるごとに申請したし、とにかく取得可能な助成金は全部もらおうと思っていました。

研究のルーツ

——さて、高村先生のご研究は自然地理学、とりわけ地下水学、

水文学が専門ですが、田中啓爾先生を師事する中、どうしても人文地理学、地誌学の研究に行けなかったかが気になります。

高村 当時は、田中先生が自然地理学も教えており、様々な知識もお持ちだったのです。たしかに専門家ではなかったわけですが、地形輪廻で有名なアメリカの自然地理学者デービス (William Morris Davis) のこともよく話していたんですよ。先に述べた「初象、顕象、残象」もデービスを踏まえての概念ですしね。

あと、高校生のときから、私は三本木高校の新戸部先生の研究を手伝っていました。新戸部先生は日本地理学会で発表するなど、研究においても精力的な先生だったのです。新戸部先生は地形や地下水の研究をしていましたから、その関係もあったのですね。

ちなみに私の学部の卒業論文は八甲田山の湿原の地形の話で書きました。それから修士課程は、茨城の鹿島半島の砂丘地形の飛び砂を研究しましたが、飛び砂の粒の大きさが風の強さによって制約されるのはなぜだろうと始めたのが土壌水分の研究でした。そして、ミイラ取りがミイラになったようなもので、地下水の研究に入り込んでいったわけです。医者が細胞を研究する様なものです。

自然地理学への関心が大きくなったのは、学部・大学院時代の指導教員であった恩師山口鎌次先生の影響もありました。山口先生は火山地質学の専門家でした。大学院は一对一で指導を受けたので、大変鍛えられたと思います。ロットン (Charles Andrew Cotton) による *Volcanoes: As Landscape Forms* (Wiley, 一九五二年発刊)

を二人で輪読したのです。非常にまじめな先生でしたので、こちらも休めず、多くのことを学べたと思っています。その当時のノートも大切に保管していますよ。

——ところで、先生は調査で国内外さまざまな地域に出かけることが多いですね。NHK大河ドラマ『いだてん』の主人公、金栗四三氏と東京高等師範学校にて競争したと言われる田中啓爾先生と同じく健脚でいらつしやいますが、昔は何かスポーツをやっていたのでしょうか。

高村 いや、特に何もやっていなかったのですが、昔から山登りが好きでした。学生の時には、友達と二人で、二尺四寸のザックを背負っているような山を回りました。福島県のカサネ山から入って、岩手県の八幡平、岩木山、まっすぐ北上して玉川温泉を通過して、十和田湖に出て八甲田山を登って、連絡船に乗って北海道へ渡りました。それから駒ヶ岳、さらに十勝の方へ行って、大雪山、旭岳に。そして、ぐるっと回って、帰りは青森県から日本海側の鳥海山に登って、出羽三山を回り、そして長野県の中房温泉で東京から来た学友五、六人と合流して、北アルプス表銀座を縦走しました。一カ月ぐらいいかりましたかね。

——その経験が研究や調査にも活かされているわけですね。

高村 卒業論文の時も一カ月間、八甲田山に籠りました。テントを

買うことができず、兄からタバコ栽培のための細長い温床ビニールをもらって、それをカラマツの枝にかけて、そこに一カ月間泊まって調査し、八甲田山の論文を書きました。

——映画『八甲田山』（新田次郎原作、森谷司郎監督、一九七七年上映）で出てくるあの極寒の地ですね。そこで一カ月間、すごくないですか。

高村 たしか伊勢湾台風（一九五九（昭和三四）年九月下旬）のあたりじゃなかったかな、とにかく寒くてね。今では熊で大騒ぎしているけど、それはあまり心配なかったですね。タヌキには遭遇したけれど、とにかく道のないところで、火山斜面の竹やぶに雪が積もり、頂上に登っていくのは本当に大変でした。そこでは、「住まば日本^{ひもと} 遊ばば十和田 歩きや奥入瀬三里半」で有名な詩人、大町桂月の墓が近くにある蕨温泉にも泊まっていました。蕨温泉っていうと温泉に泊まっているようにだけど、なんてことはない、薪を積んでいる小屋を借りましてね、そこに寝袋を用意して一カ月間ベースキャンプにして分析のため寝泊まりをしました。米を買って、途中まで馬で運んで、そこから歩荷で頂上の方のキャンプ場に運んでいった。一人であんなところによく行ったものだとは今では考えますよ。

——先生の野外調査、フィールドワークの原点はここにあるのですね。



写真2：卒業研究における八甲田山での調査風景（1959年）

出典：高村名誉教授所蔵写真

高村 そうですね。学部生でのこの経験があったからこそですね。

——あと、高村先生は様々な機材や技術を用いて研究をなされています。こうした知識や方法はどこで培われたのでしょうか。

高村 それはやはり明電舎で働いていた時でしょうね。特に水銀の真空蒸留室での経験ですね。それと明電舎を辞めた後に、現在の東急本社（渋谷区南平台町）の場所にあった小さい電気屋さんでもアルバイトしていました。その会社では、アメリカの進駐軍が使い古した冷蔵庫やモーターなどを解体し、組み直して販売していました。だから、素人だけど自分で学んで、電気関係のいろんな知識や技術が身に付いたわけです。

ところで、私が学生時代には立正の地理学教室で自然地理学をやる人が少なかったもので、それほど多くの機材がありませんでした。そのため測量については中央大学の機材を借りていましたし、東京教育大学におられた石川与吉先生の研究を手伝った代わりに、砂を細かく選別する篩ふるいや磁気を用いたセパレーターなど機材を借りて研究もやっていました。ようやく私が助手になって以降、立正の地理学科にも委託研究により少しずつ機材が揃っていききました。一九六九（昭和四四）年には文部省の助成にてスイスのWILD社の研究用一級図化機「A-7オートグラフ」を導入し、その後、学部生用に「B-8型二級図化機」も購入しました。これらの機材を通して五〇年近く前から産学官連携をやっていたのですが、こうした経験がその後、地球環境科学部を作る動機にもなったと思います。

副手、助手、寮監時代

——ところで、修士の頃には副手、その後は助手になられていますか、これらはどのようなお仕事だったのでしょうか。

高村 学生の面倒を見るのが一番で、あとは地理学教室や立正地理学会関連の仕事です。冬はダルマストープに石炭を入れるのと、そこで餅を焼いたりもしていました。先生から指導を受けながら、学生の立場でもありましたしね。あと、ドクター（博士課程）の時は第一品川学寮の寮監もやっていました。第一品川学寮の先代の寮監が北尾義昭さん（元事務局長、常任理事）で、第二品川学寮の寮監が中尾堯さん（元文学部教授）、その前任が丸子亘さん（元文学部教授）でした。

——寮監のお仕事は大変だったのですか。

高村 やっぱり学生のコントロールは大変でした。学生の身元引受にも品川警察署に二回ほど行きましたよ。まだ若かったので、学生の揺らぐ気持ちもわかってはいました。

今考えてみると、日本全国から集まった学生たちをあんな寮に必死に詰め込むのもどうかと思いますよ。品川学寮はなにせ旧赤線地帯、昔の「茶屋遊び」の跡だから。部屋と部屋の間には障子一枚、ふすま一つだから。そこに昔の女の人たちのお色直しの鏡台がまだあって、おしろいの匂いもぷんぷんしていた。

——名残はあったわけですね。

高村 もう、色や匂いまでありましたよ。下に行くと折檻部屋みたいなものもありました。あそこはね、片方が海蝕崖で、もう一方が

江戸・東京へと至る東海道沿い。崖の方はまだ埋め立ててなかったですからね。北品川の道路から入れば一階だけど、裏の崖側の方は地階で、海の見える低さだった。そこにハシゴで入るような恰好になっていて、私たち寮監の目は全然届かなかった。だから夜中に寮生たちはよく抜け出していたんですよ。

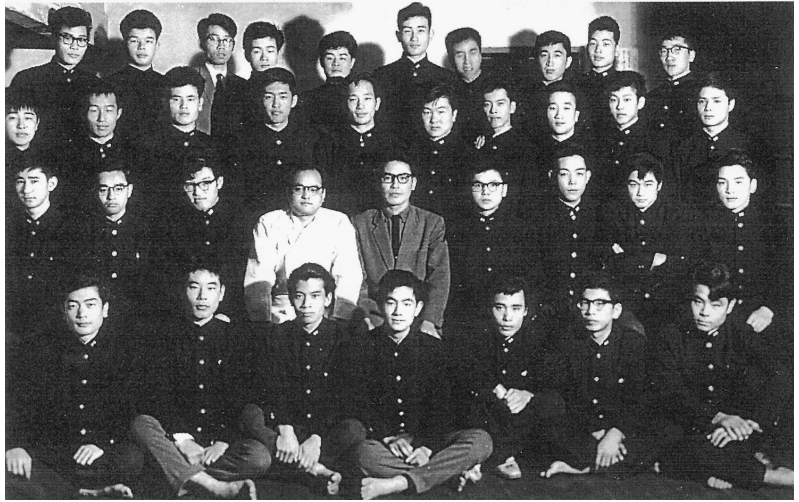


写真3：第一品川学寮の寮生たち 2列目中央が高村名誉教授（1961年）
出典：高村弘毅『私の履歴書』2010年

寮生と寮監の関係について一つ逸話もありますよ。とある寮の寮監の方が夜遅く帰寮すると、寮長に鍵をかけられて、中に入れなくなったことがあったらしいんです。それで戸をドンドンと叩いても誰も鍵を開けてくれない。仕様がなからその方、誰も見てないだろうと、食堂の近くにある電柱をコアラのように登って窓から部屋に入ろうとしたそう。すると、後ろから足をトントンと叩く者がいる。「お前は何やってるのだ」と。「私はこの寮監です」と返すと、「寮監がなんでこんな電柱に登っているのだ」と。そして「寮監だったら寮生はみんなあんたを知っているっていうことなの？」と警官が言うから、「もちろん」と彼が威張って言ったのじゃないのかな。そしたら寮長を呼んで、警官が「この人は今電柱を登っていたんだが、あんたたちの寮監か」と尋ねたところ、寮長は「私は知りません」と、他の寮生も「知らないね」と答えたらしい。まさに夏目漱石の『坊っちゃん』

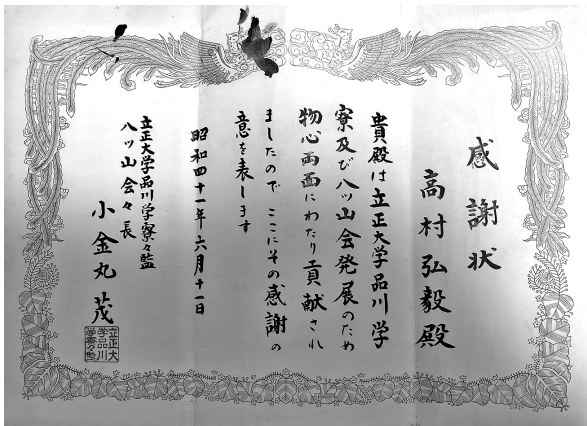


写真4：第一品川学寮同窓会「ハツ山会」からの感謝状
（高村名誉教授所蔵）

に出てくるバツタの話ですね。今ではもう笑い話ですよ。

ちなみに元寮生たちとは今でも関係があります。八ツ山会という第一品川学寮の同窓会があり、卒業後は高校や中学校の校長、郵便局の局長などを務めた元寮生たちが集まり、私もよく参加します。東海道が五反田方面と北品川方面に分かれる場所に八ツ山という橋があるのですが、会の名称はそこからとっています。かつては『やつやま』という会誌も発行していました。寮生との関係はいまも生きています。

海外での共同調査

——続いて、海外調査についてお聞きしたいと思います。初めての海外調査は一九六七（昭和四二）年、久保常晴文学部教授を团长とするネパールのティラウラコット遺跡の共同発掘調査ですね。

高村 そうです。初めて行ったとき、カルカッタ（現在、コルカタ）に先遣隊が迎えに来るから心配しない方がいいと言われて意気揚々と出発しました。何も知らないで行ったんです。若い数名の考古学の大学院生を連れてね。そしたら誰も来てないのです。このときにはもう困りました。しかも、世にも名高いカルカッタ、そこに何も知らない男がポツンと、いやあ、本当に死ぬ思いをしたね。ここからジープや調査機材・食料などを陸揚げする際の関税処理の大仕事が始まりました。

——前年に専任講師になられたばかりですね。

高村 はい。予定していた先生が遅れたこともあり、結果的に私が年上となったのです。そして、カルカッタの税関とすったもんだ、かなり時間がかかりました。そのときはもうやり合っているなかで写真撮った撮らないとなり、私は全部フィルムを捨て、向こうもびっくりしちゃって。そういうこともあったの。それで、ようやく一ヶ月ほどかかって、真夜中にネパール領事館を脱出できました。当時、インドとパキスタンの紛争の影響もあったのでしょいうね。

——ところで、先生はなぜメンバーに選ばれたのですか。

高村 先に仏教学部の先生がメインで始め、それから考古学が入り、そして地理も必要ということで、人文地理学の大村肇先生と私がメンバーに入りました。だけど、地理学科の青野寿郎先生は猛反発でしたね。「あなたたちは小間使いにされるだけで、研究にはならないよ」と、当時言っていた。でも、私は、史学科の坂詰さん（坂詰秀一元文学部教授、第二七代学長）と付き合いがあったし、また副团长として現地調査を主導されていた中村瑞隆先生（元仏教学部教授、第二二代学長）とは同郷のよしみもあった。そして高校時代にも共同調査の経験があったので、行ってもいいと思っていました。

——語学は大丈夫だったのですか。

高村 渡航にあたり、もちろんそれなりの勉強はしましたからね。だけど、カルカッタにいる人々の英語は独特でわかりづらかった。



写真5：第一次ティラウラコット遺跡調査での測量風景（1967年）

出典：高村名誉教授所蔵写真



写真6：第三次ティラウラコット遺跡調査（1971～72年）調査、

中村瑞隆元学長と 出典：高村名誉教授所蔵写真

——この発掘調査は、釈尊が出家するまでの青年期を過ごしたカピラ城の位置特定に大きな影響を与えることになったわけですが、この初めての海外共同調査において、高村先生ご自身の成果は何だと思われるでしょうか。

高村 それは測量ですね。実際に測量して、製図をして、大学に提供しました。次に参加した一九七一（昭和四六）年一月から三ヶ月にわたる第三次調査でもやはり測量を実施しました。測量の杭はシロアリに弱いので、ここでの測量には特殊な樹心のある杭、四角の杭を作りました。けっこう高額だったので、当時、地理学の院生だった寺田稔さん（元北海学園大学教授）とあの灼熱の太陽光で測量して、トラバーを組んで、きれいに製図し、地図を作成しました。それはすごい成果だと思う。この地図をその後も各所で利用してもらっていることはありがたいことだと思っています。

——この経験は先生の海外研究のルーツですね。

税関では、お金はいくらだとか、この物品はどうだこうだと説明したりして大変でした。お金は大村先生が持つて行くと聞いていたのだけど、なかなか来なかったのです。それでようやく来られるというので待っていたら、大村先生、インドで車の免許をとっていたらしい。大村先生はそれぐらいの大物なんです。ところで、陸揚げの際、最初にサインしたのは小生だったので、結局、インドからネパールに入るまでの全行程、運送隊長をすることになりました。

高村 研究者としても、個人としても、大きな困難をクリアしたというのはいいい経験ですね。それと、余談ですが、中村瑞隆先生の命

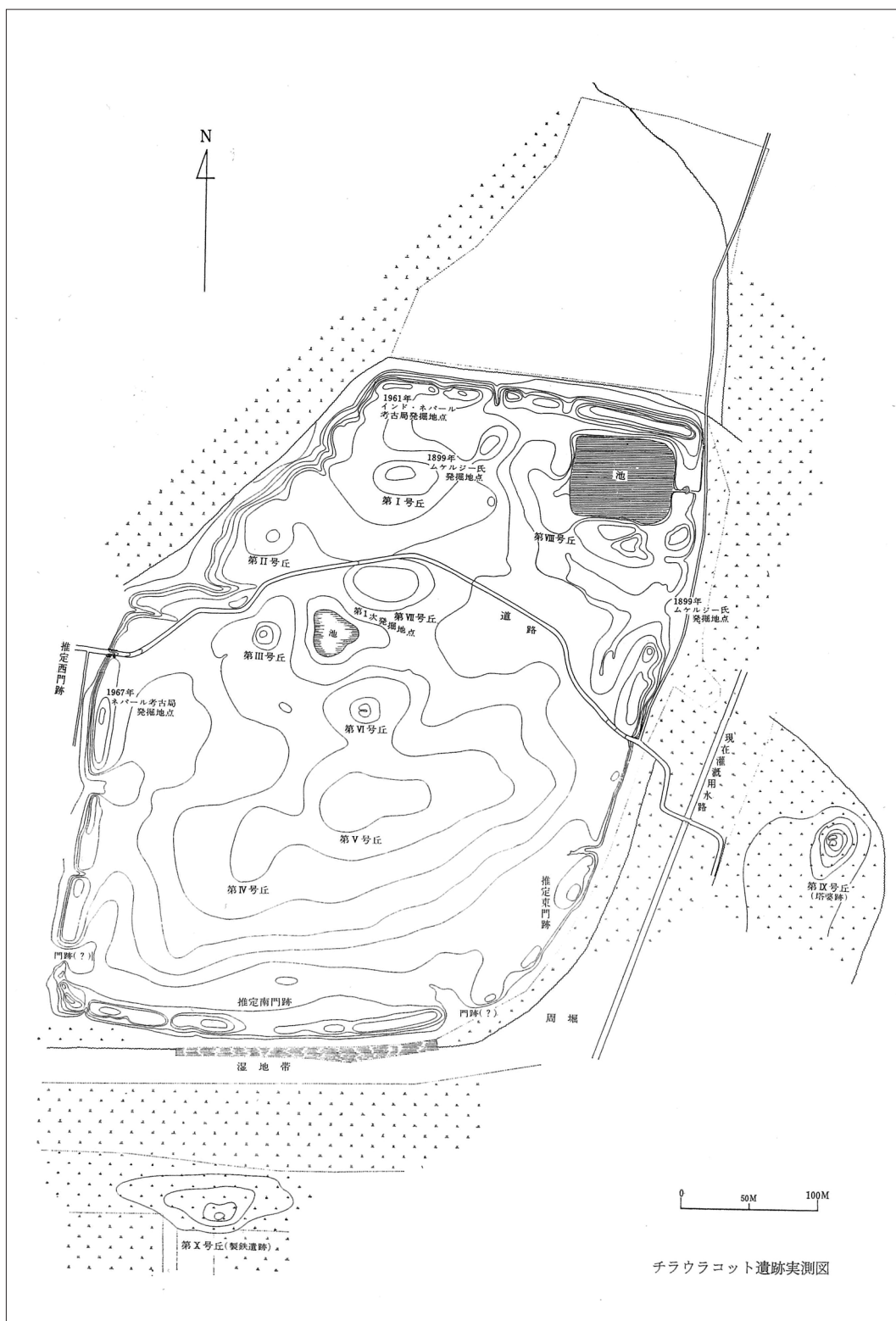


図1：ティラウラコット遺跡実測図

出典：立正大学『ネパール王国チラウラコット遺跡—第一次調査の記録—《1967・10～68・2》』1968年

を受けて、ネパール国との調印のサインをいただきに、山中湖畔の東洋経済新報社の別荘で療養中の石橋湛山学長に会いに行きました。それもいい経験です。

——その後、先生は個人としても様々な海外調査を進めていくわけですね。海外調査において初めてご自身で計画したのはどこでしょうか。

高村 アフリカかな。一九七八(昭和五三)年、サバティカルでオランダのInternational Institute for Aerial Survey and Earth Sciencesにいるときに、日揮(現在の日揮ホールディングス株式会社)の長谷川氏から「天然ガス開発前に水が必要だから調査に来てくれ」とのJICA(国際協力事業団)名の電報が入ったんですね。それでアルジェリアに一カ月くらいいたのかな。サハラ沙漠のど真ん中で調査をして、水の方は大丈夫ということで大規模なプラントが着工しました。これは約三、〇〇〇億円の仕事だったと思います。

——その後、一九八〇(昭和五五)年には韓国に調査に行かれていますが、これは世界銀行と韓国政府のお仕事だそうですね。

高村 韓国政府がソウル首都圏の人口の拡大に対応する水資源を確保したいということで、世界銀行に援助金を申請したのでしょうね。そして、世界銀行の投資でもって、一九八八(昭和六三)年のオリンピックに間に合うように、日本テクノ株式会社の調査に参加

しました。あと韓国については、地理学科の高野史男先生の科研費で、澤田裕之さん(元地球環境科学部教授)、大塚昌利さん(元地球環境科学部教授)、鈴木厚志さん(地球環境科学部教授)との済州島の共同調査にも参加し、その成果は高野史男編著『韓国済州島・日韓をむすぶ東シナ海の要石』(中公新書、一九九六年)としても発刊されています。

一九八〇年代中頃にはJICA関連でザンビアやカタルにも調査隊長として行きました。ほかにもテレビ朝日が資金を出してくれて、ザンビアの難民キャンプに井戸を掘ろうということで、近藤晴次井戸技士や諸岡青人記録映画監督らとともに、上総掘り井戸の技術提供にも関わりました。

——お話しいただいたほかにも、現在に至るまで様々な海外調査に行かれておりますが、そのバイタリティやモチベーションはどこから出てくるのでしょうか。

高村 科研費やJICAからの外部資金については、研究に対する期待や評価だろうと思います。それに応えるべく、科学研究費の報告書や日本地理学会、日本地下水学会などで国際シンポジウムも開催してきました。一九九八(平成一〇)年にオーストラリア、メルボルンで開催されたIAH(国際水文地質学会)の国際会議の招待講演(タイトル: Lost Pore Space and Apparent Groundwater Level in Dependence on Underground Structures in Urban Area)も行いました。

あとは私の研究生生活五〇年間は大変だったけれども、常に感謝の気持ちですね。大学の研究者の自分がやれることは、研究業績で社会に「立正」の名前を売ることが大事だと思っています。これは私の信念です。

一九八九シルクロード踏査隊

——さて、立正大学の一大事業として、一九八九（平成元）年に実施された「日中友好親善一九八九 立正大・新疆大合同シルクロード踏査隊―西域南・北道、木孜塔格峰（六、九七三米）、タクラマカン砂漠―」プロジェクトがあります。およそ二カ月間（一九八九年七月二日～九月二九日）、両大学の教職員、学生、医師、撮影隊総勢五〇名以上が参加、高村先生も総隊長・学術隊長として大いに活躍されています。これはワンダーフォーゲル部の三〇周年記念事業として行われているわけですが、企画はワンダーフォーゲル部から立ち上がったということですか。

高村 そうですね。対外的には学長のイベントということだったかと思っています。

——企画立案当時、学長は渡邊寶陽先生、その後、大澤正男先生が務められており、高村先生は学生部長、課外活動振興委員会委員長という立場でした。編纂室所蔵の史料によれば、ワンダーフォーゲル部の部長を務める事務職員の宇田川芳伸さんから高村

先生のところに話がいったかと思いますが、先生はどのように思われていたのでしょうか。

高村 もちろん宇田川氏の努力がなければ実行できなかったでしょうが、私も「ぜひやろう」という思いでした。アフリカやアジアのカナート（地下用水路）研究で有名な地理学者、小堀巖先生（元東京大学教授）との共同研究において、新疆大学とのコネクションも私は持っていましたしね。

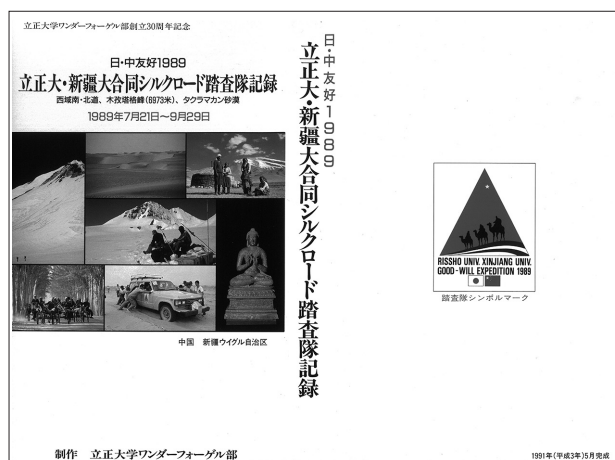


写真7：VHSテープ『日中友好親善1989 立正大・新疆大合同シルクロード踏査隊記録』（立正大学ワンダーフォーゲル部制作）のパッケージ 出典：史料編纂室所蔵

——総額約五、〇〇〇万円のプロジェクトとなりますが、ワンダーフォーゲル部の自己資金や寄付、大学の支援だけじゃなくて、外務省と文部省、読売新聞社、日本山岳会や日蓮宗宗務院なども後援しているのですね。

高村 外務省や文部省などは形式的なものでしょうね。それよりも本学の名誉顧問だった櫻内義雄さん（元衆議院議長）の影響が強く、中国とのパイプも役立ったと思います。

——実際に動き出して、読売新聞社やTBSテレビが関わる中で、立正大学の宣伝効果も期待されたようですね。

高村 当時、立正大学を一生懸命宣伝しなくては、というのも一つの目的だったのですよ。

——当時の史料を見ますと、このプロジェクトの意義について、高村先生は三点挙げられています。引用しますと、「①中国、ソ連、東欧の開放政策に呼応、まさにタイムリーな企画。しかも大学単位の初交流の意義は大きい。②本学の元学長石橋湛山さんが総理大臣のとき、「日中友好のかけ橋となろう」と国交回復を念願された。その意志を継いだ真の友好の具体的な形として、最も適したものと信じる。③仏教伝来のルートであるシルクロードを東から西へその源流をさかのぼる。それは仏教大学としての伝統をもつ本学にしかやれないことであると自負している」（『日蓮宗

新聞』一九八九年七月一〇日付）ということです。このプロジェクトの具体的な成果はいかがでしょうか。

高村 この日蓮宗新聞の記事にもこのように書いていますね。「今回は、水文化史的調査研究も行ってきた。砂漠^(ママ)地帯における地下水利用から水資源と文化の発展、地球規模的な砂漠化^(ママ)まで——その原点にさかのぼる形で調べるのも意義深い」とある。まさにこれにきますが、沙漠化がより進展し、グローバルな問題となった現在においても、この研究調査の意義は当を得たものと思います。あと、石橋湛山先生が掲げていた「日中米ソ平和同盟」構想の実現も頭にはありました。

——行程中に印象深かった点を教えていただけないでしょうか。

高村 その年の六月に起こった天安門事件の影響もあってか、中国政府から派遣された警察や銃を携帯した兵隊の警備のプレッシャーが強かったですね。それに道中何日もお風呂に入れないのもきつかったし、あとは食料の問題ですね。隊員一人一羽ずつ鶏を持って行ったのですが、なかなか殺めることができませんでした。持参した日本食品と羊肉のみで過ごしました。そして、野生のヤクに遭遇したのですが、この時は本当に命をなくすのではないかと大変怖かったです。

——残されている当時の映像（『日中友好親善一九八九 立正



写真8：シルクロード踏査、現地の人々と

出典：高村名誉教授所蔵写真



写真9：シルクロード踏査での学生との食事風景

出典：高村名誉教授所蔵写真

大・新疆大合同シルクロード踏査隊記録」、立正大学ワンダーフォーゲル部制作）からも過酷な状況が想像できます。あと、研究の意義とともに、この企画ではワンダーフォーゲル部の学部生・院生八名が同行しておりますが、彼らに対する教育的効果はいかがお考えでしょうか。

高村 私は大きかったと思いますよ。沙漠やおそらく普通は入れな

い場所、一人では行けないところに連れていったのですからね。若き青年たちの成長にも繋がったことでしょう。あと後輩の学生たちにも影響があったと思います。立正大学が新聞に載って、全国放送で二週にわたり放映されたことで（TBSテレビ『日曜特集・新世紀紀行』一九九〇年二月四日、一日放映）、本学を誇りに思う気持ちが出てきたことでしょう。

そして、中国では立正大学は新疆大学とともに有名になりました。新聞にも報道されましたし、中国中央電視台という日本のNHKにあたるテレビ局で、大気中から気温の変化を利用して水をとるなど、私たちの活動が放送されたんですよ。その影響もあってか、新疆大学などから七人が立正大学に留学し、私の研究室にきて、学位記も五人取りました。だから、いまでも向こう行くと、立正大学はけっこう名前が知られているのです。

私個人としても、この一九八九（平成元）年のプロジェクトを機に、大型の科学研究費を取得し（「タクリマカン沙漠南縁オアシスにおける水文環境の変化と沙漠化」平成一〇（一二年度科学研究費補助金（基盤研究A））、本格的にタクリマカン沙漠の沙漠化研究に取り組むことになり、何度も当該地区に調査に出かけております。なお、修士論文で

鹿島半島の飛び砂を扱い、現在はPM2.5問題に関心を示しておりますが、そもそも水があれば砂は飛ばないわけです。私は水文学が専門であります。砂を研究しているのはまさにここに理由があるわけです。その意味で、このシルクロード事業は私の研究にとっても十分に意義深いものであったと考えています。

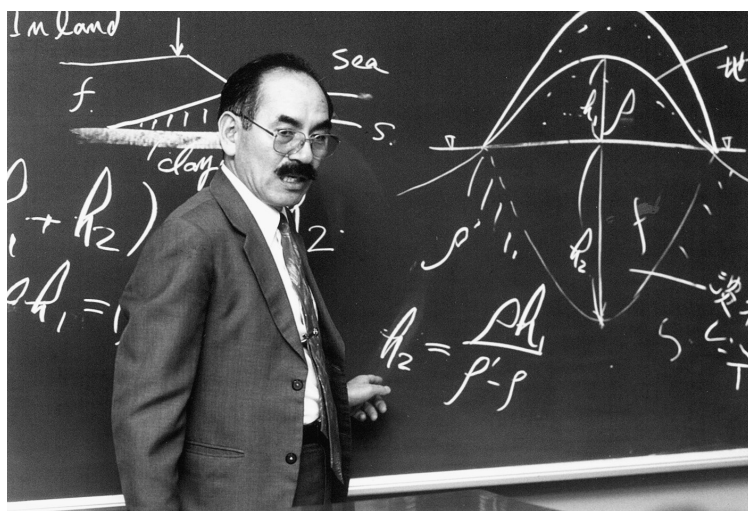


写真10：地球環境科学部での授業風景

出典：高村名誉教授所蔵写真

立正大学へ向けてのメッセージ

——最後にこれからの立正大学へのメッセージをお願いできますでしょうか。

高村 やはり「モラリスト×エキスパート」の推進ですね。あの標語は私が学長のときに作った言葉です。今、若者に最も欠けているものはやはりモラルです。ただし、モラルがあれば足りるかといえはそうではなく、大学ですからエキスパートになる必要がある。ここでのエキスパートとは、秀才でも天才でも専門家でもなく、豊かな教養と高度のモラルを備えるということです。したがって、入学してくる学生さんも成績だけではなく、四年間の成長の中で、人間の豊かさとも進化させてほしいと、そして異才を成熟させることを願っております。

そして、学長時代にはもう一つ「一学部一優策」も推進していました。それぞれの学部がオンリーワンの特徴を見出し、「立正大学ならではの」というものを創り出し、とにかく大学がそれを売り込めばいいと言ってきました。たとえば、うちの経済学部はほかの大学のこの分野に関しては負けないぞっていうように、各学部学科が研究でも教育でもそれぞれ他大学に勝るとも劣らない、競争力をつけてほしい。これが私の予てからの願いです。

あと、学長の時には史料編纂室の立ち上げにも関与しました。伝統がある大学だからこそヒストリーをきちんと残すことが大事です。その意味で、史料を保管する場所を確保し、検索できるように

しておかなければならないというのも私の持論でした。一五〇年史の編纂のためにも、史料編纂室の適切なスペースの確保と、管理システムをきちんとしていただきたいということを希望しておりますよ。

——大変心強いお言葉ありがとうございます。今回は先生の学生時代、そしてアジアやアフリカでの海外調査、そしてシルクロード踏査隊を中心に貴重なお話をお聞かせいただきました。地球環境科学部設立のお話や学長時代の成果などまだまだ先生にはお聞きしたいことがたくさんありますが、お時間となりました。今回はどうもありがとうございました。

【参考文献】

高村弘毅『私の履歴書』、二〇一〇年。

高村弘毅『橘とともに半世紀』、立正大学地球環境科学部環境システム学科内高村弘毅名誉教授叙勲祝賀会実行委員会、二〇一四年。

立正大学地理学教室創立60周年記念会沿革史刊行小委員会『立正地理の六十年——立正大学地理学教室・立正地理学会——』、立正大学地理学教室創立六〇周年記念会、一九八五年。

立正大学地理学教室創立九〇周年実行委員会『立正大学地理学教室九〇周年記念誌』、立正大学地理学教室創立九〇周年実行委員会、二〇一五年。

立正大学博物館『立正生の学び舎——熊谷キャンパスの半世紀——』、立正大学博物館、二〇一七年。

高村弘毅名誉教授 立正大学在学・在職期間の略年表

西暦	和暦	文学部に関する主な出来事 ※は高村名誉教授の略歴	熊谷キャンパス、地球環境科学部に関する主な出来事
一九二四	大正13	大学令による立正大学設立認可、文学部（宗教学科、哲学科、社会学科、史学科、文学科）設置	
一九二五	大正14	日蓮宗大学を立正大学専門部と改称認可、宗教科・国語漢文科・歴史地理科を設置	
一九二六	大正15	国語漢文科と歴史地理科を併せて高等師範科と改称	
一九四七	昭和22	文学部地理学科（旧制）増設認可	
一九四九	昭和24	学校教育法により新制大学として認可。文学部第Ⅰ部（昼間部）に哲学科、史学科、文学科、社会学科、第Ⅱ部（夜間部）仏教学部に宗学科、仏教学科、文学部に史学科、文学科、社会学科、地理学科を設置	
一九五〇	昭和25	文学部英文学科（第Ⅰ・Ⅱ部）増設認可	
一九五一	昭和26	専門部廃止	
		文学研究科（仏教学専攻・社会学専攻・国文学専攻・国史学専攻）修士課程設置認可	
一九五三	昭和28	大学令廃止による旧制文学部地理学科廃止	
一九五五	昭和30	大学院文学研究科地理学専攻修士課程増設認可	
一九五五	昭和31	※立正大学文学部（Ⅱ部）入学	
一九五七	昭和32	文学部第Ⅰ部地理学科増設認可	
一九五八	昭和33	※文学部（Ⅰ部）編入	
一九六〇	昭和35	立正大学人文科学研究所設置	
		※立正大学文学部卒業	
		※立正大学大学院文学研究科地理学専攻修士課程入学	
		※文学部地理学科副手	

一九六二	昭和37	※立正大学大学院文学研究科地理学専攻修士課程修了 ※同博士課程進学	
一九六三	昭和38	※文学部地理学科助手	
一九六四	昭和39	大学院文学研究科地理学専攻博士課程増設認可	熊谷キャンパス開設工事開始 熊谷キャンパス用地測量
一九六五	昭和40	大学院文学研究科英文学専攻修士・博士課程増設認可	
一九六六	昭和41	※立正大学大学院文学研究科地理学専攻博士課程研究指導修了満期退学	
一九六七	昭和42	※立正大学短期大学部専任講師 大学院文学研究科哲学専攻修士課程増設認可 ネパール仏教遺跡第一次発掘調査開始（以降、一九七七（昭和五二）年一一月の第八次発掘調査まで継続）	熊谷キャンパスに教養部を開設 熊谷キャンパス第一回入学式挙行
一九六八	昭和43	大学院文学研究科社会学専攻博士課程増設認可	熊谷キャンパスに短期大学部社会科学科移転
一九六九	昭和44	大学院文学研究科史学専攻修士課程増設認可	短期大学部全科移転
一九七三	昭和48	立正大学図書館に田中啓爾文庫（地理学関係図書約二万冊）設置	
一九七四	昭和49	※立正大学短期大学部助教授	
一九七六	昭和51	文学部公開講座開設	
一九七七	昭和52	※文学部助教授 大学院文学研究科史学専攻博士後期課程増設認可	
一九七八	昭和53	考古学陳列室を熊谷校舎に開設	
一九七九	昭和54	※International Institute for Aerial Survey and Earth Science (ITC), Netherlands 設立	熊谷図書館竣工、開館
一九八一	昭和56		法学部設置

西暦	和暦	文学部に関する主な出来事 ※は高村名誉教授の略歴	熊谷キャンパス、地球環境科学部に関する主な出来事
一九八二	昭和57	※文学部教授	
一九八三	昭和58	※文学研究科博士課程D〇合教授	
一九八四	昭和59	文学部創設六〇周年を迎える	
		※日本地下水学会功労賞受賞	
一九八五	昭和60		新福利厚生棟（ステラ）竣工
一九八六	昭和61	英米学科を英米文学科と名称変更、大学院文学研究科英文学専攻修士課程・博士後期課程を英米文学専攻と名称変更	
		※学生部長	
一九八九	平成元	日中友好一九八九 立正大学・新疆大学合同シルクロード踏査隊	
		※文学部長	
		※立正大学学園評議員	
		※全学協議会協議員	
一九九二	平成4	開校一二〇周年記念行事	
		※大韓民国地下水学会理事（平成一八年三月三一日まで）	
一九九三	平成5	大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程増設認可	
一九九四	平成6	文学部（史学科・国文学科・英米文学科・社会学科・地理学科）昼夜開講制・夜間主コース設置認可	
		文学部創設七〇周年	
一九九五	平成7	文学部と中国新疆大学との学術交流に関する調印	教養部廃止
一九九六	平成8	文学部と中国中央民族大学との学術交流に関する調印	社会福祉学部（社会福祉学科、人間福祉学科）設置
一九九七	平成9	文学部哲学科昼夜開講制・夜間主コース設置認可	熊谷三号館（地球環境科学部棟）竣工
		※地球環境科学部設置準備委員長	

一九九八 平成10	※地球環境科学部教授	地球環境科学部（環境システム学科・地理学科）設置
一九九九 平成11		短期大学部閉学
二〇〇〇 平成12	※地球環境科学研究科委員長 ※地球環境科学研究科D〇合教授	立正大学環境科学研究科設置
二〇〇一 平成13	文学部「昼間コース」を「昼間主コース」に名称変更 ※地球環境科学部長 ※全学協議会委員	地球環境科学研究科設置 田中啓爾文庫、熊谷図書館への移動作業（二〇〇二年度まで）
二〇〇二 平成14	文学部文学科設置（国文学科、英米文学科を文学科へ統合 立正大学第Ⅱ部廃止）	立正大学博物館開館
二〇〇四 平成16	文学部八〇周年記念祝賀会・記念講演会開催 ※中国新疆大学客員教授 ※第二九代立正大学学長 ※学校法人立正大学学園副理事長 ※立正大学エンタープライズ(株)取締役	
二〇〇五 平成17	学園開校一三〇周年中高創立一〇〇周年記念事業 ※産学官連携推進センター長	
二〇〇六 平成18	蘊奥賞創設 文学部、大崎校舎にて四年間一貫となる 文学部、昼間主、夜間主コースの定員を統合する ※埼玉県熊谷市環境審議会会長	
二〇〇七 平成19	※第三〇代立正大学学長 ※日本国際地図学会功労賞受賞 ※青森県文化賞受賞 ※熊谷市市政功労賞受賞	熊谷校舎再開発事業計画起工式挙行
二〇〇八 平成20		地球環境科学部、創立一〇周年記念行事開催

西暦	和暦	文学部に関する主な出来事 ※は高村名誉教授の略歴	熊谷キャンパス、地球環境科学部に関する主な出来事
二〇〇九	平成21	新疆大学と学術交流協定締結 ※研究機構研究機構長 ※校友会会長	熊谷再開発事業第一期工事A（アカデミックキューブ・スポーツキューブ）竣工
二〇一〇	平成22	※退職、立正大学名誉教授 ※立正大学非常勤講師 ※日本地下水学会特別功労賞 ※日本沙漠学会功労賞	熊谷再開発事業第一期工事B（ゲートプラザ・水景地・外構工事ほか）竣工
二〇一一	平成23	※日本カンボジア開発振興協会会長	田中啓爾文庫、熊谷図書館に移管完了
二〇一三	平成25	※非常勤講師満了 ※富士学会功労賞	法学部、品川キャンパスに移転
二〇一四	平成26	文学部創設九〇周年記念事業 ※春の叙勲 瑞宝中緩章 ※熊谷市市政功労賞受賞（二回目）	地理学教室九〇周年記念事業 熊谷キャンパス五〇周年 地球環境科学部、創立二〇周年記念行事開催
二〇一五	平成27		
二〇一七	平成29		
二〇一八	平成30		

余録

谷山ヶ丘に建つ新校舎

— 絵はがきからの考察 —

平 伊佐雄

『立正大学史紀要』第四号の「余録」には、石山秀和氏による「立正大学の新校舎の竣工—絵はがき二枚からの紹介—」と題した一九二四（大正十三）年完成の大学新校舎を絵はがきから紹介する論考が掲載されている。^①この新校舎は、一九一六（大正五）年の火災で多くの建物を失った後、新たに鉄筋コンクリートで再建され、名称を日蓮宗大学から立正大学へと変更し、大学令による認可を受けて昇格した年に完成した校舎でもあった。^②ところが、石山氏が丁寧に紹介しているように、その絵はがきは新校舎の竣工直後に撮影した写真を用いて作製されている。新校舎の周囲には有刺鉄線の柵が張られ、木材や土砂も積まれたまま、校舎内部の写真に至っては、まだ電灯が付いていない状態での撮影である。現代的な広報の感覚からすると、なんだか建築確認用の証拠写真を絵はがきにしたようにも見え、少し違和感を憶えてしま

う。故にこの「謎の絵はがき」を取り上げたところに石山氏の考察の面白さがある。ちなみに、一九二四（大正十三）年竣工の当校舎について少しか補足をするなら、一九二四（大正十三）年五月十七日に昇格となった本学は、その二日後の五月十九日の午後一時から講堂にて昇格認可報告式を挙行し、翌月の創立記念日たる六月十五日からは、四日間をかけて昇格と新築落成、創立二十年を祝う壮大な会を開催している。^④特に十五日の祝賀の式典では、参列者には記念品と大学校舎および大学八景の絵はがき、また『希望と回顧』と題した冊子等を呈していることがわかつている。^⑤

一方、新校舎は、前年の十二月二十五日に三階屋上まで全部コンクリートを打ち終わり、上棟式は一九二四（大正十三）年一月二十一日に執り行われている。^⑦二月十四日には文部省による視察を受け、新校舎の落成は、一九二四（大正十三）年六月十日と記録にはある。^⑧私は、石山氏が取り上げた絵はがき二枚は、六月十五日の祝賀会において記念品として配られたものではないかと推察しているのだが、周囲が整理された直後に撮影されたと思われる絵はがきも存在するため、確証を得られない状況にある。^⑩

さて、昇格時の新校舎に深入りし前置きが長

くなったが、今回取り上げるのは、谷山ヶ丘（谷山）—現在の品川キャンパスの地—に創建された日蓮宗大学林（立正大学の前身）の校舎の写真を用いた絵はがきである。それと並行して絵はがきのモチーフになっている谷山に建設された校舎についても探ってみることにしたい。前号に引き続き、絵はがき紹介の第二回目と言ってもよいだろう。

まず、「日蓮宗大学全景」とキャプションがついた絵はがきから紹介していきたい。ご覧頂ければわかるように、この絵はがきには左上部に六百八十七回降誕会記念「*187*」と記されたスタンプが押されている。よって、一九〇八（明治四十二）年二月十六日に執り行われた聖祖六百八十七回降誕会の記念絵はがきとして用意されたものであることがわかる。詳細は不明であるが、写真自体は、一九〇四（明治三十七）年四月に専門学校令による認可を受けて開学した日蓮宗大学林の初期の姿を撮影したものと考えられる。^⑪当写真の初出は、一九〇四（明治三十七）年十二月発行の『大崎学報』第一輯であり、少なくとも一九〇四（明治三十七）年末までに撮影されたものであると推察される。^⑫この絵はがきは、先に述べたように写真こそ日蓮宗大学林の開林間もない頃のものを利用しているものの、一九〇七（明治四十）



日蓮宗大学全景

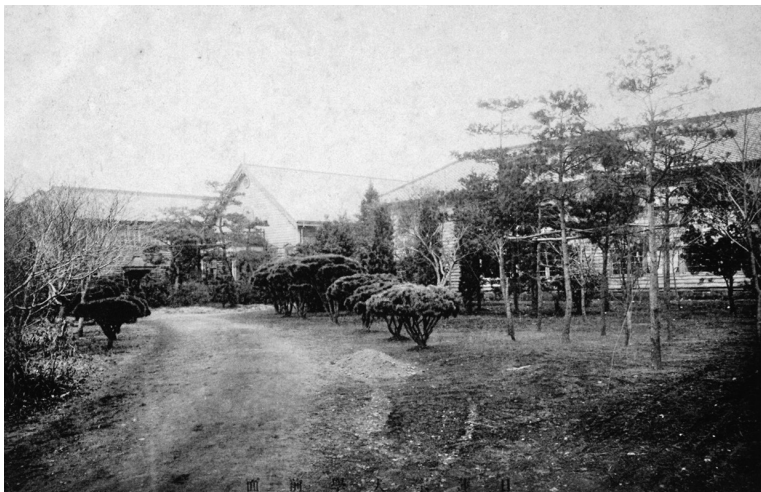
年四月に日蓮宗大学へと名称変更が認められ、新しい学則のもと、リスタートをきった年に作製されたものであることにも注目すべきである。当然、キャプションも日蓮宗大学となっており、日蓮宗大学林が日蓮宗大学となったことを示す絵はがきとしての意味を持っている。

立正大学史料編纂室では、当該絵はがきを三

枚一組で入手した。このセットは、「日蓮宗大学全景」の他、「日蓮宗大学前面」、「日蓮宗大学裏面運動場」とキャプションがついた三枚ものである。全ての絵はがきに日蓮宗大学との記載があるので、日蓮宗大学へと名称変更後の絵はがきであることに間違いはない。しかし、この三枚のうち「日蓮宗大学前面」と「日蓮宗大学裏面運動場」の絵はがきは、キャプションが同じ色で同じ活字体、表面のデザインも同じであり、この点が先の「日蓮宗大学全景」の絵はがきとの違いである。従って、作製時期が異なると推察される。「日蓮宗大学全景」の絵はがきは、既作製品であった絵はがきの下部のキャプションを日蓮宗大学に修正し、降誕会のスタンプを押したものかもしれない。後の二枚には、降誕会のスタンプはない。この三枚一組のセットの内訳が元々どの様なものであったのかも、現時点では確認が出来ない。

日蓮宗大学（林）の初期における絵はがきの作製について、記録で確認できるものをいくつか挙げると、まず一九〇七（明治四十）年二月の第六百八十六回聖祖降誕会の際、二葉一組の絵はがきを頒布した¹³こと。この時の絵はがきは、「中等科四年の發起にて本學全景及び聖跡豆州伊東條海浦怒濤の二葉一組の優美なる寫眞繪葉書に記念スタンプを押捺して希望者に實費

を以て頒布せり」と『大崎学報』第六輯に詳細な紹介がある。「本學全景」と記されていることから、その写真は、今回紹介している「日蓮宗大学全景」の写真である可能性がある¹⁴。記念スタンプをこの時に押捺しているのも興味深い。ついで、一九〇九（明治四十二）年二月に開催された第六百八十八回聖祖降誕会の際に頒



日蓮宗大学前面

布された三枚一組の絵はがきである。『日宗新報』による聖祖降誕会の報告では、「当日の光彩を添へるために尚三枚一組の絵葉書も発売された。多少の残部があるから希望者には一組五銭の実費で頒つ筈だ。」と記されている。今回紹介している絵はがきは、この間の降誕会のものであるから、絵はがきセットは、毎年の降誕会に頒布用として準備されていたことがわかってくる。

さらに、一九一〇（明治四十三）年に、新設道路の開通と正門の完成記念として作製されたと思われる絵はがきの存在も確認できる。『日宗新報』にはこの時の絵はがきは、「新設道路の開通と共に建設せられたる正門を初め大講堂教場運動場等四枚一組にて寫真頗る鮮明に出来せり定價一組十銭日蓮宗大學内消費組合發賣」と記されている。¹⁵時代性もあつてか、校舎の整備については、写真付きの絵はがきで報告・紹介するのが、流行ったことをうかがわせるものである。¹⁶

ここで少し脇道にそれ、谷山に最初に建設された日蓮宗大学林の校舎について紹介してみたい。

立正大学の前身である日蓮宗大学林が谷山に校舎を構えた経緯は少し複雑である。もともと谷山のキャンパス用地は、一九〇一（明治三十

四）年に中檀林新築用の土地として購入されたものであり、初めから日蓮宗大学林のために用意されたものではなかった。第一学区の中檀林の新築については、既に一八九八（明治三十一）年に決定されていた事柄で、その後、一九〇一（明治三十四）年に中檀林新築委員会が組織され、中檀林校舎の建設へと動き出した。建設予定地は当初、複数の候補があつたが、最終的に大崎村の谷山に決定した。¹⁷一九〇一（明治三十四）年十月十一日には第一学区中檀林新築委員会が中檀林新築予定地（谷山）を見分して「第一学区中檀林新築敷地」と記した表札を建てたと言う。¹⁸これらの動きを記している当時の『日宗新報』には、この地について

「敷地は荏原郡大崎村元下大崎字谷山峰原耕地と称する所にして同地松原和助外四名の所有にして畑山林合反別九反九畝十歩外畦畔四畝十三歩十三筆（実測坪数三千百十三坪）この購入代金八千九百四十圓なり位地高燥にして坂を上れば一面高底なき平地なり南東北を開放し目黒川は鐵道線路（新橋赤羽間の）に沿ふて流れ水田を隔てて島津侯爵邸、品川御殿山と相對峙し空氣流通よく飲料水も差支なき見込學校敷地としては不都合なし」各地への距離 宗務院大檀林へは半里、池上本門寺へは四十町餘なり大崎停車場は山下僅かに五六町東海道線より来らは品川にて乗替へ其次は日本鐵道線によらは赤羽にて乗替へ四驛を経て本停車場なり」と詳細な報告が載っている。¹⁹

一九〇二（明治三十五）年七月二日、（第一学区）中檀林新築委員会は会合を開き、寄宿舎の増室を決め、大崎の現場も確認して道路の変更を行うなどの仕様を変更している。²⁰また、同年九月から十月にかけて、建築仕様書の審議が中檀林新築委員会にて行われ、森孫右衛門を棟梁とすることが決定し、十一月二十日には新築起工式を挙行している。²¹こうして着々と進んだ中檀林の校舎の新築であつたが、一九〇三（明治三十六）年六月に開催された第二次臨時宗会にて、かねてから議論されていた中檀林合併論が現実化し、学則も変えて教育制度を大きく変換することになった。この宗会で、小檀林の全廃、三中檀林の合併、一大学林設立の実行委員会の設置が決定されたのである。²²ここにきて宙に浮いてしまった第一学区中檀林の新築校舎は、宗会後の二十日に行われた第一学区大会において、これを宗門に献じることにした。中檀林新築委員会のメンバーでもあつた脇田堯惇が大学林設置委員の一人として就任し、新たに大学林の設置へと動き出すことになったのである。²³このような経緯の中、一九〇三（明治三十六）年八月十九日、谷山の新校舎は

落成した。⁽³⁰⁾こう見てくると、日蓮宗大学林の校舎は、大学林の設置決定に至るときには既に中檀林の校舎として完成していたことがわかるだろう。

完成していた中檀林の校舎や敷地についての詳細は、日蓮宗大学林開林時の『大學林設立成功報告書』⁽³¹⁾に見て取ることが出来るので、以下に紹介しておく。

「元第一学区区中檀林ヨリ領収ノ校舎敷地等
二關スル目錄

- 一 校舎敷地荏原郡大崎村大字谷山百五十三番地外十三筆
- 一 周圍土堤 百十三間
- 一 講堂 一棟 木造瓦葺平家 六十三坪
- 一 教場 一棟 木造瓦葺總二階 百四坪八合四夕
- 一 寄宿舎 二棟 木造瓦葺總二階疊建具附 百七十坪
- 一 食堂 一棟 平家 三十四坪
- 一 便所及浴室 平家 廿一坪五合
- 一 廊下 塗炭葺 五十四坪
- 一 植木 五百餘株
- 一 前項二対スル圖図並ニ書類一切以上⁽³²⁾

その後、日蓮宗大学林設立実行委員会が一九

〇四（明治三十七）年一月に臨時委員会を開き、「科学室及薬品室等の増築」を決める。⁽³³⁾大学林と同時に大学林の中等科を認可学校として申請することにしたための措置であろう。同年二月十一日発行の『日宗新報』は、この時期の大崎の状況を「大崎新大學林の近状」と題して、講堂、二階建ての教場、二階建ての寄宿舎二棟、食堂、浴室の存在と開講前に増築するものとして、化学教場及び準備室、準備室、機械室、炊事場を目下工事中と報告している。⁽³⁴⁾こ



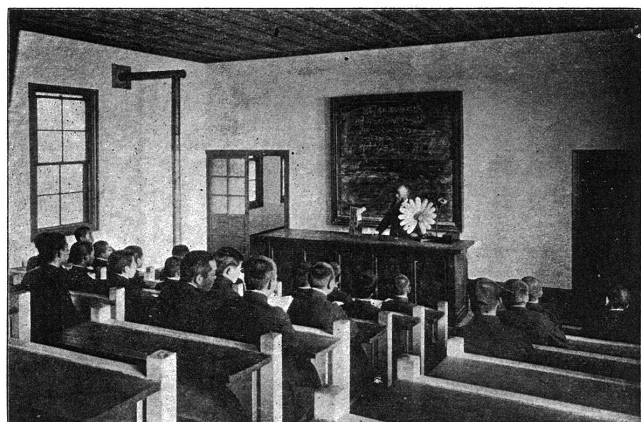
室本標物博化理林學大宗蓮日

『大崎学報』第二号 明治三十八年六月発行 より転載

うして、直前になって増築した校舎を併せ、一九〇四（明治三十七）年四月一日、日蓮宗大学林は専門学校令に基づく学校としてここ谷山の地に開林、開講したのである。⁽³⁵⁾

ここで、日蓮宗大学林開林時の校舎の様子を先の絵はがきの写真と『大崎学報』第貳輯に掲載されている教室の写真を参考にしながら、今一度、見ていくことにしたい。開林時の様子を紹介する際、筆者がしばしば参考にしているのは、一九〇四（明治三十七）年五月に発行の『日宗新報』に掲載された北林雪仙氏による「大崎大學林參觀記」である。⁽³⁶⁾これは開林間もない頃に谷山のキャンパスについて触れた記事であり、当時の大学林の様子を垣間見させてくれる記録でもある。少々長い引用となるが、当時の校舎を見学するつもりで、北林氏の參觀記の一部をご覧頂きたい。

「大崎街道から一寸左に折れた畦道を過て、胸を突くやうな坂を登りきると、カラタチの植えられた芝の築地が二丁程続ひて、仮門に日蓮宗大学林、門から建物まで一丁玉川砂利が布を洒したように布かれた道の左右に、短葉松が行儀よく並で、躑躅椿なぞ時の花が麗はしく咲てゐる、公園風に植へられた樹木には一々寄附者の名が立札にしてある、受附に来意を通ずると、二階の賓室に通される、二十畳ばかりの明



室 教 別 特 林 學 大 宗 蓮 日

『大崎学報』第二号 明治三十八年六月発行 より転載

るい室でまだ装飾ではないが、撥條付きの椅子に囲まれた卓子に新聞雑誌が二三種オレンジ色のカーテンを捲くと、これは絶景、田圃を隔てて御殿山を正面に見、左袖が崎の岡から右は東海寺森まで一望の中、眼の下を汽車が通る、「教場の模様は高等師範によく似て居る、生徒用の机は一人一脚の最新式である……（中略）……図書教室は殊に麗しく設備も十分である、螺旋形の梯子を降りて長廊下を傳て大講堂に入る、是は食堂風の建築で、一面に段通が敷きつ

めてあつて、ベンチが並んでゐる、正面の佛壇には曼荼羅と祖像、是は飯高談林の記念なそうな、堂内は森嚴何となく宏壯の感に打たれる、其後方が理科教室の一棟、標本機械室、まだ揃てはおらぬが人躰解剖模型や石、塑像などが壘々として所狭きまで、薬品室を通りぬけて、實檢室、前方は低く後列は高く傾斜をなした教室で、後列の者にも試験が見るやうに謂わば西洋の劇場風に出来てゐる、凡て其筋規定の通り設備間然すところなし、次が參觀者の最も注意を要する寄宿舎惣二階建て二棟、各室の障子は悉く硝子を用ゐる隅から隅まで一目に見へるやうになつてゐる、壘表は備後が使である一室八疊乃至十二疊押入は別に附てゐる一室四人乃至六人位、玉火蓋の瓦斯が高ひ天井から下つてゐる……（中略）……示された校舎圖から重なる建物を舉れば、講堂七〇坪、教場二二三坪（二階建）寄宿舎三五〇坪（二階建）食堂四〇坪、炊事場二四坪、化學教場四〇坪、浴室二二坪、廊下五四坪……」先に挙げた『大学林設立成功報告書』での中檀林校舎の記録と数値が異なる部分があるが、明らかに異なるのは、増築した化學教場（＝科学教場か）であらう。³⁷

次に見て頂きたいのは、「日蓮宗大学裏面運動場」とキャプション付けられた絵はがきである。二階建ての建物が四棟写っていることに気



日蓮宗大学裏面運動場

がつくだらう。大学林設立時の建築物は、先に挙げたとおりである。そこで、写真に映っている校舎群を判別してゆくと、左奥の二階建ての二棟は寄宿舎であり、右奥の二階建ての建物は教場である。正面中央の平屋建物は科学教場、その左はおそらく食堂である。中央奥は講堂であるから、残る二階建ての建築物、つまり、写真の右

端に見える建物が残る。この建築物は一体何だろうか。この建物は、一九〇六（明治三十九）年に新たに増築されたものと推察される。その手がかりは、一九〇六（明治三十九）年十月十四日発行の『大崎学報』第五輯に掲載されている記事である。

「本年四月新學年開始と共に新入學入舎生増加食堂の狹隘を告げ同月四日工を起し食堂の一隅なる會計室を取毀ち四間に八間半の食堂を擴張せり續て七月十一日より食堂に接せる浴室を後庭の隅に離隔改造し其跡に會計室及書記室の二階建一棟建築に着手本月中には竣工の筈なり又本暑中休課を機とし寄宿舎疊表替、戸障子の繕ひ、校舎全部の防腐劑塗等諸般の修繕を加へたり」³⁹⁾

わかりやすく言うと、学生が増えて校舎が手狭になったので、増築したということである。一九〇五（明治三十八）末には、大学林協議員会で教場の増築や設備、物置新築、運動場の購入、補習科の設置等の要求を検討していたようであり、一九〇六（明治三十九）年五月開催の第三宗会では、日蓮宗大学林の学則を改正、名称も日蓮宗大学への変更を決定し、大学林校舎の増築に関しては、予算などの点において意見が分かれたものの、結局、校舎の補修や増築が認められた。日蓮宗大学林は、開林の三年後

の一九〇七（明治四十）年四月に日蓮宗大学と改称し、研究院、本科、予科、中等科、予修科と組織替えを行ったのである。⁴¹⁾

さて、そうなるこの絵はがきの写真は、一九〇六（明治三十九）年以降に撮影された日蓮宗大学林、あるいは日蓮宗大学の姿であることがわかる。他の現存する写真を見ると、日蓮宗大学では、さらに体育場などの施設らしきものが写ったものもあることから、その後、校舎の増築や拡張があったことを確認できる。ところが、これらの初期の校舎は、一九一六（大正五）年三月八日の夜、予科の二階建教場から出火した火災により、ほぼ全ての校舎が焼失するという大惨事を被ることになる。⁴²⁾

二〇一九（令和元）年十二月現在、立正大学は、新校舎（十三号館）を建築中である。竣工の際に新築記念の絵はがきが発行されるかは不明である。それはさておき、現在、立正大学には日蓮宗大学林時代から現存している建造物は存在しない。ただ、日蓮宗大学時代、一九一〇（明治四十三）年五月十五日に創立記念陸上運動会、正門新道開通式、正門捧献式、図書館敷地地鎮祭などの催しが行われた際、浅草本覺寺住職智鳳院日透（沖日透）の喜捨によって作製、設置された石燈籠が、この品川キャンパスの地、谷山ヶ丘で本学を見つめ続けているのみ

である。⁴³⁾

（謝辞）本稿の執筆に関して、史料収集や解釈の点で専門員の佐藤研一氏の御世話になった。ここに記し感謝の意を表したい。

註

（1）石山秀和「立正大学の新校舎の竣工―絵はがき二枚からの紹介―」『立正大学史紀要』第四号 二〇一九（平成三十一）年三月二五日 一〇七―一〇八頁。

（2）石山秀和「立正大学の新校舎の竣工―絵はがき二枚からの紹介―」一〇八頁。

（3）「五月十七日に立正大学と改称認可され、十九日午後一時に講堂で昇格認可報告式は行われた」『月刊宗報』第九十号 日蓮宗宗務院 一九二四（大正十三）年六月十日発行 一二二頁。

（4）「大学昇格・創立二十年・新築落成祝賀会」は、十五日は祝賀会、十六日は講演会、十七日は運動各部大会、十八日が全国大中学雄弁大会で構成されている。日蓮宗宗務院『月刊宗報』第九十一号 一九二四（大正十三）年七月十日発行 三六―三八頁。「母校たより」『大崎学報』第六六號 立正大学同窓会 一九二五（大正十四）年三月 一九〇頁。

（5）『月刊宗報』第九十一号 日蓮宗宗務院 一九二四（大正十三）年七月十日発行 三六―三

八頁、「母校たより」『大崎學報』第六六號 立
正大学同窓会 一九二四（大正十四）年三月
一九〇頁。

（6）『月刊宗報』第八十五号 日蓮宗務院 一
九二四（大正十三）年一月十日発行 二〇頁。

（7）『月刊宗報』第八十六号 日蓮宗務院 一
九二四（大正十三）年二月十日発行 五頁。

（8）『月刊宗報』第八十七号 日蓮宗務院 一
九二四（大正十三）年三月十日発行 一六頁。

当号には、校舎新築状況と題した部分に、
「二月二十一日上棟式を挙行せる増築校舎は其
後内部工事を進捗して壁塗及床張を終り目下
窓取附中にて四月新学年よりは大学校舎とし
て使用し得る見込確実なり。」と記されてい
る。その際、新校舎の設計設備には特に満足
なる旨を伝えられていたものの、一九二四

（大正十三）年六月十日発行の『日宗月報』で
は「従来の木造校舎にては狭隘を感じ、昨年
以来建築中の鉄筋コンクリート新校舎も内部
稍工事竣功せるを以て四月十四日より大学部
は新校舎にて授業を開始せり」と記されてい
る。よって、四月までに周囲を含む全体の完
成には至っていなかったことがわかる。日蓮
宗宗務院『月刊宗報』第九十号 一九二四
（大正十三）年六月十日発行 二十二頁。

さらに、当時、学生であった相原氏が、昇
格記念冊子として発刊した『希望と回顧』の
表紙裏に当時の様子を記しており（立正大学

史料編纂室にてコピーを所蔵）、そこには、
「我々が学部生となり昇格が実現された。校舎
はコンクリートは良いが窓がまだできてゐな
く、簾を下ろして雨をよけ乍ら講義を聴いた
ものであった」とある。これについては、早
川誠氏が『立正大学學園新聞』vol.20 三頁
二〇一三（平成二五）年一月一日発行、で紹
介している。

蛇足であるが、もし六月十五日の落成祝賀
会で新校舎の写真入り絵はがきを配布しよう
とするなら、絵はがき作製上の都合から、撮
影日を校舎や周囲の整地が完全に整うまで延
ばすことが出来ず、新校舎がある程度完成し
た所で撮影を行い、絵はがき作製に取りかかっ
たのではないかと私は推察しているのだが、実
際はどうかであったのだろうか。

（9）「母校たより」『大崎學報』第六六號 立正大
学同窓会 一九二五（大正十四）年三月十日
一八九頁。

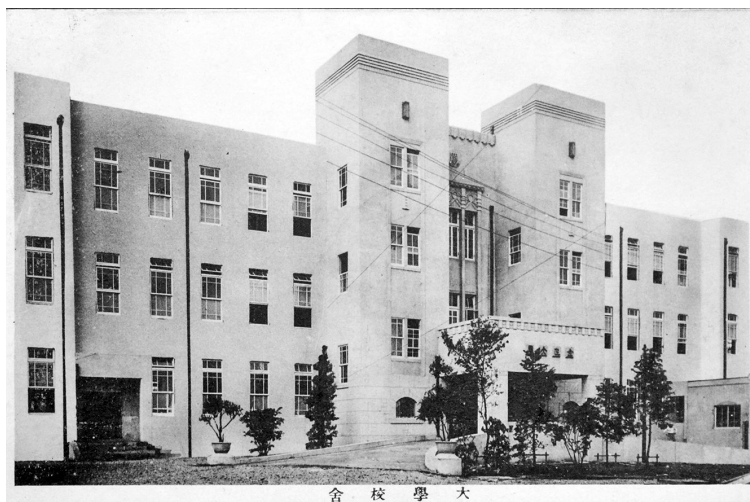
拜啓時下愈御清祥の段爲法爲國慶賀の至りに存候
扱て兼ねて昇格申請中の日蓮宗大學は各位の甚大なる
御援助により去る五月十七日立正大學として認可相成
事爲法同慶の至りに存じ候
是偏に佛祖三寶の御加護と護法熱誠なる各位の御高配
尙此淨業をして有終の美をなさしむべく今後共各位一
層の御丹精と御援助とを抽でられ度右昇格の御報告旁
併て懇願候也

立正大學基金壹百萬人會 總裁

管長 大僧正 磯野 日筵



（10）立正大学史料編纂室では、今年度、「大学校
舎」と「中学校舎」そして「來賓室」の写真
を利用し、紙の外袋には「立正大学絵はがき」
と印刷された三枚組の絵はがきセットを入手
した。このセットには、立正大学基金一百万人
会総裁 管長 大僧正 磯野日筵の名による、
昇格認可にあたり支援してくださった方々へ
の感謝状が封入されている。この三枚の絵はが



竣工後、大学の銘板も入れられ、各部分とも整った時点での新校舎

- きセットの内訳が、後代のものと入れ替わっていないければ、当時の物と判断できる。そして、何より、この絵はがきに用いられている写真は、新校舎が落成し、周囲の工事まで完了した後に撮影したものであることを注記しておきたい。
- (11) この校舎の写真は、立正大学に現存する数少ない初期の写真のひとつでもあり、大学を紹介する際には、いろいろと利用されている。一九〇四（明治三十七）年四月十一日発行の『日宗新報』革新三百七輯 創立八百八十三號には「日蓮宗大学林開林式記念写真」「校舎の正面の写真」「日蓮宗大学林設立委員会の写真」の三点が載っているが、それらの写真とも違うものである。開林時の写真として確実なのは、この『日宗新報』の方である。ただ、『大学林設立成功報告書』には、大学林の開林式の費用の一部として大学林写真二千枚の記載があるので、『日宗新報』に載っている大学林の写真、あるいは、本稿で紹介している写真が開林式に配布された可能性もあるだろう。
- (12) 『大崎学報』第一号 日蓮宗大学林同窓会 一九〇四（明治三十七）年十二月発行。
- (13) 『大崎学報』第六号 日蓮宗大学同窓会 一九〇四（明治四十）年六月三十日発行 百〇九〜百一十一頁。
- (14) 『大崎学報』第六号 日蓮宗大学同窓会 一九〇四（明治四十）年六月三十日発行 百一十一頁。
- (15) 『日宗新報』革新四八三輯 創立一〇五九號 日宗新報社 一九〇九（明治四十二）年三月一日発行 二十三頁。
- (16) 『日宗新報』革新四八三輯 創立一〇五九號 日宗新報社 一九〇九（明治四十二）年三月一日発行 二十三頁。
- (17) 『日宗新報』革新五三三輯 創立一一〇九號 日宗新報社 一九一〇（明治四十三）年七月二十一日発行 十八頁。
- (18) 『日宗新報』革新五三三輯 創立一一〇九號 日宗新報社 一九一〇（明治四十三）年七月二十一日発行 十八頁。
- (19) 絵はがきの始まりは、郵便制度上、私製の紙片（私製はがき）を用いてはがきが送れるようになった一九〇〇（明治三十三）年の郵便法規則の改正以降のこととされている。しかし、その後まもなくして起こった絵はがきブームの嚆矢は、通信省が発行した官製絵はがきであった。「絵葉書の誕生」『ミュージアムレター』No. 19 学習院大学史料館 二〇一二（平成二十四）年四月五日発行 三頁。
- (20) 『日宗新報』革新九八輯 六七四號 日宗新報社 一八九八（明治三十一）年七月八日発行 二十二〜二十三頁 新築費は、学区内寺院より支出とし、一九〇三（明治三十六）年五月までの五年間を期限とする旨、決定されている。
- (21) 第一学区中檀林の建設経緯、特に池上本門寺にあつた第一学区中檀林の火災の後、当中檀林新築への流れについては、『立正大学の百四十年』に詳細に記されているので、そちらを参照願いたい。『立正大学の百四十年』学校法人立正大学学園 二〇一二（平成二十四）年五十六〜五十七頁。
- (22) 「……委員會を芝區二本榎町川合氏宅にて開くべく電報を發したりしに協田、津田、前田、本橋、伊奈、酒井、黒澤等の諸師相会し更に實地を見分し「第一學區中檀林新築敷地」と大書させる標木を建てたり」『日宗新報』革新二一六輯 創立七九二號 日宗新報社 一九〇一（明治三十四）年十月十八日発行 二十一頁。
- (23) 『日宗新報』革新二一六輯 創立七九二號 日宗新報社 一九〇一（明治三十四）年十月十八日発行 二十一頁。
- (24) 『日宗新報』革新二四二輯 創立八一八號 日宗新報社 一九〇二（明治三十五）年七月七日発行 十五頁。
- (25) 『日宗新報』革新二四九輯 創立八二五號 日宗新報社 一九〇二（明治三十五）年九月十五日発行 二十一〜二十三頁。
- (26) 『日宗新報』革新二五一輯 創立八二七號 日宗新報社 一九〇二（明治三十五）年十月六日発行 二十六頁、『日宗新報』革新二五三輯 創立八二九號 日宗新報社 一九〇二（明治三十五）年十月二十七日発行 二十二

頁。

- (27) 『日宗新報』革新二五六輯 創立八三二號
日宗新報社 一九〇二(明治三十五)年十一月十七日発行 十七頁、『日宗新報』革新二五七輯 創立八三三號 日宗新報社 一九〇二(明治三十五)年十一月二十四日発行 一八頁。

- (28) 『日宗新報』革新二七七輯 創立八五三號
日宗新報社 一九〇三(明治三十六)年六月十六日発行 二二五頁。なお、甲部の質疑の中で、大学林の名称の所以を問われ、原案起草時、日宗大学、大檀林、大学林の三案があったが、起草委員の多数決により大学林に決めた旨の回答がなされている。同四頁。

- (29) 『日宗新報』革新二七九輯 創立八五五號
日宗新報社 一九〇三(明治三十六)年七月七日発行 十七二五頁。

- (30) 「第一學區中檀林として新築せる荏原郡大崎村の校舎は學區大會に於いて満場一致拍手勸呼の裡に宗門に貢献し、……中略……壮麗なる六百餘坪の校舎は去十九日を以て全部落成せり」『日宗新報』革新二八四輯 八六〇號 日宗新報社 一九〇三(明治三十六)年八月二十五日発行 一八頁。

中檀林から大学林への遷移を端的に記している史料は、第一学区寺院総代・中檀林長であった久保田日龜が脇田堯惇に宛てた感謝状であろう(一九〇四(明治三十七)年四月一

日付)。「立正大学の二〇〇年」の十五頁には、感謝状そのものが写真掲載されている。『立正大学の二〇〇年』学校法人立正大学学園 一九九二(平成四)年。

- (31) 『大学林設立成功報告書』大学林設立実行委員会 委員長 脇田堯惇 明治三十七年四月四日、管長、大僧正である久保田日龜宛ての冊子。なお、『立正大学史紀要』創刊号(二〇一六(平成二十八)年三月二十五日発行)、五九一六七頁に翻刻史料としてその全部が掲載されている。

- (32) 『大学林設立成功報告書』十一頁。

- (33) 「尚ほ中等科をして文部省の認定を得て認可学校と成さんため昨三十六年十二月委員會議決條件第七の決議を變更して化學教場及藥品室二棟を増築する事に改め目下工事中」『日宗新報』革新二九九輯 創立八七五號 日宗新報社 一九〇四(明治三十七)年一月二十一日発行 二十六頁。

- (34) 『日宗新報』革新三〇一輯 創立八七七號
日宗新報社 一九〇四(明治三十七)年二月十一日発行 三十三十一頁。

- (35) 『日宗新報』革新三〇七輯 創立八八三號
日宗新報社 一九〇四(明治三十七)年四月十一日発行 二十六二九頁。

文部省告示第八十一號「東京府東京市芝区私立日蓮宗大檀林同府荏原郡池上村私立日蓮宗第一學區中檀林山梨県甲府市私立日蓮宗第二

學區中檀林及京都府上京區私立日蓮宗第三學區中檀林ヲ合併シテ東京府荏原郡大崎村ニ私立日蓮宗大学林ヲ設置シ且京都府京都市上京區二高等科第一部ノ教場ヲ置キ明治三十七年四月一日ヨリ専門学校令ニ依ルノ件認可セリ 明治三十七年四月二日 文部大臣 久保田讓」『官報』第六千二百二十三號 明治三十七年四月二日。

- (36) 『日宗新報』革新三一〇輯 創立八八六號
日宗新報社 一九〇四(明治三十七)年五月十一日発行 十三一十五頁。拙稿「谷山ヶ丘の学び舎から」『立正大学史料編纂室の葉』第二号 立正大学史料編纂室 二〇一六(平成二十八)年一月五日発行。

- (37) 『日宗新報』革新三一〇輯 創立八八六號
日宗新報社 一九〇四(明治三十七)年五月十一日発行 十三一十五頁。

- (38) この報告書には、大学林図面製作費として金十三円との記録もあるので、大学林開林時の図面が存在していたことは確かである。現時点で立正大学に当図面は現存しておらず、建物の配置などの基本的な調査すら困難を極める。

- (39) 『大崎学報』第五輯 日蓮宗大同窓会 一九〇六(明治三十九)年十月十四日発行 七十七頁。五月の『日宗新報』には、新入生が多く、寄宿舎は満員、食堂も狭隘になったので、会計室を取り払って食堂を拡張した旨が

報告されている。『日宗新報』革新三八一輯

創立九五七號 日宗新報社 一九〇六（明治三十九）年五月三日発行 十八〜十九頁。

(40) 『日宗新報』革新三八〇輯 創立九五六號 日宗新報社 一九〇六（明治三十九）年四月二十三日発行 二十二頁。第三宗会の議題、原案は、『日宗新報』革新三八三輯 創立九五九號 日宗新報社 一九〇六（明治三十九）年五月二十一日発行、に掲載されている。

(41) 『日宗新報』革新三八四輯 創立九六〇號 日宗新報社 一九〇六（明治三十九）年六月一日発行 八〜十七頁、『日宗新報』革新三八五輯 創立九六一號 日宗新報社 一九〇六（明治三十九）年六月十一日発行 三〜九頁。

(42) 「高臺の事として水利不便なる爲め手を下すに由なく遂に二階建教場一棟、寄宿舎二棟、講堂、図書室、化學室、生徒控所、受附、事務室及び食堂の十棟を烏有に歸し……」『日蓮宗大學全焼』『朝日新聞』一九一六（大正十五）年三月九日 朝刊 五頁。『日宗新報』では、より正確と思われる実情を報告している。以下参照のこと。「出火は、三月八日午後八時前後場所は教室の南寄二階の中等科二年と中等科四年との教室の間なり、出火の原因は今日尚不明なり、……（中略）……新教室、會計事務所柔道部水事場を除き全部焼失せり。』『日宗新報』革新八〇一輯 創立一三七七號 日宗新報社 一九一六（大正五）年五月八日発行

三頁。

(43) 『日宗新報』革新五三一輯 創立一一〇七號 日宗新報社 一九一〇（明治四十三）年七月一日発行 二十三頁、「史料編纂室だより 第八回 本学の歴史を見つめ続ける石灯籠」『立正大學學園新聞』vol.33 二〇一六（平成二十八）年四月一日発行。



2019（令和元）年10月撮影の灯籠

平成三十年度 史料編纂室業務記録（抄）

月 日	業務・行事	内 容
4月		
4月1日(日)	入学式展示（第4回目）	【テーマ】品川・熊谷キャンパスの校舎変遷パネルの展示と各種資料の配布 於…立正大学熊谷キャンパスアカデミックキューブ1階正面入口左脇来展者合計約160名
4月1日(日)	展示用リーフレット『写真で見る立正大学の歴史』配布開始	【内 容】展示を補助する内容のリーフレット
4月19日(木)	第1回 大学史料編纂室会議	新年度の体制や業務分担について等
4月20日(金)	「編纂室だより」第16回 （『立正大学学園新聞』連載）	【タイトル】「大学広報誌の変遷⑦」 「『立正大学学生新聞』への改称」 （第141号）
4月25日(水)	第1回 専門委員会	立正大学百五十年史編纂委員会（規程等）について等
5月		
5月17日(木)	第2回 大学史料編纂室会議	運営委員会、講習会、体験講座について等
5月30日(水)	第1回 大学史料編纂室運営委員会	平成30年度事業計画、平成29年度事業報告 於…品川キャンパス1号館1階第4会議室・熊谷キャンパスゲートプラザ3階第1会議室【遠隔利用】
5月30日(水)	第2回 専門委員会	『立正大学百五十年史』の執筆分担について等
5月31日(木)	全国大学史資料協議会東日本部会二〇一八年度総会出席	【内 容】総会、東日本部会創立30周年記念講演会・シンポジウム、情報交換会 於…國學院大學渋谷キャンパス
6月		
6月14日(木)	第3回 大学史料編纂室会議	体験講座、講習会、オープンキャンパス展示について等
7月～8月		
7月1日(日)	「編纂室だより」第17回 （『立正大学学園新聞』連載）	【タイトル】「大学広報誌の変遷（最終回）」 「『立正大学学生新聞』復刊までの道のり」 （第142号）
7月6日(金)	第5回 大学史料編纂室主催講習会開催	【テーマ】「国士館百年史編纂を巡って」 【講師】熊本好宏氏（国士館史資料室専門員） 於…立正大学品川キャンパス1号館4階第7会議室（B） 合計19名（他大学・企業の年史編纂関係者含む）

月 日	業務・行事	内 容
7月6日(金)	大学史料編纂室アーカイブズ体験講座(第3回)	【内容】第1部 アーカイブズとアーキビストについて、立正大学の歴史について、第2部 見学の歴史について、第3部 見学の歴史について、第3部 編纂室主催講習会の聴講於・立正大学品川キャンパス PILLConnほか
7月12日(木)	第4回 大学史料編纂室会議	【参加者】合計3名 オーラル・ヒストリー、学園新聞執筆について等
7月12日(木)～ 8月21日(火)	学長政策費申請事業「史料のデジタル化」	劣化貴重史料9998コマの写真撮影
7月22日(日)	オープンキャンパスにて写真展開催	【テーマ】「写真で見る立正大学の歴史」「本学関係者の色紙展示」
8月5日(日)		来展者数：7/22(品川) 61名、 8/5(熊谷) 160名、8/11(品川) 108名、8/12(品川) 182名、 8/18(熊谷) 87名
7月25日(水)	立正大学百五十年史編纂委員会規程施行	
8月5日(日)	第1回 史料調査出張	本学熊谷図書館
8月8日(水)	第3回 専門委員会	立正大学百五十年史編纂委員会規程・執筆について等
8月23日(木)	第5回 大学史料編纂室会議	企画展、学園新聞、オーラル・ヒストリーについて等
月 日	業務・行事	内 容
9月	9月13日(木)	第6回 大学史料編纂室会議
10月	10月1日(月)	【編纂室だより】第18回(「立正大学学園新聞」連載)
10月18日(木)	第7回 大学史料編纂室会議	【タイトル】「石橋湛山学長の年賀状」(第143号)
10月26日(金)	第5回 オーラル・ヒストリー実施	オーラル・ヒストリー、ホームカミングデー展示について等
11月	11月3日(土)	【聞き取り対象者】山下正治氏(本学名誉教授) 於・立正大学品川キャンパス役員応接室
11月15日(木)	第8回 大学史料編纂室会議	「平成30年度「校友の集い」ホームカミングデーin橘花祭」 「色紙に見る立正大学の歴史」(パネル展示)ならびに各種資料の配布於・立正大学品川キャンパス9号館1階エントランスホール 来展者・卒業生、(元)教職員が230名以上来展 企画展、ニューズレター、紀要について等

月日	業務・行事	内容	月日	業務・行事	内容
12月	第2回 大学史料編纂室運営委員会	平成31年度 事業計画（案）、予算（案）について 於…品川キャンパス11号館8階第6会議室・熊谷キャンパスゲートプラザ3階第1会議室【遠隔利用】	3月8日(金)	第3回 大学史料編纂室運営委員会	平成30年度 事業報告（案）について等 於…品川キャンパス1号館1階第4会議室
12月5日(水)			3月14日(木)	第11回 大学史料編纂室会議	新年度の業務分担について等
12月13日(木)	第9回 大学史料編纂室会議	史料のデジタル化、レファレンス対応の基準について等	3月25日(月)	『立正大学史紀要』第4号発行、『立正大学史料編纂室の栞』（ニューズレター）発行	
1月			3月26日(火)	平成30年度 第2回 史料調査出張	於…一般社団法人日本建築学会図書館
1月10日(木)	「編纂室だより」第19回 （『立正大学学園新聞』連載）	【タイトル】「立正大学創立記念日の由縁」	3月26日(火)	他大学見学	於…武蔵学園記念室
1月21日(月)	大学史料編纂室企画展「スポーツに見る立正大学の歴史」を開催	【テーマ】「スポーツに見る立正大学の歴史」 於…品川キャンパス9号館1階大学史料編纂室常設展示スペース	3月27日(水)	平成30年度 第3回 史料調査出張	於…金谷山大明寺資料室
2月			3月29日(金)	史料編纂室アーカイブズシステム導入・構築作業完了	
2月28日(木)	第10回 大学史料編纂室会議	運営委員会について、入学式展示について等	3月29日(金)	他大学見学	於…立教学院展示館
3月					
3月1日(金)	大学史料編纂室企画展「スポーツに見る立正大学の歴史」を延長開催	【テーマ】「スポーツに見る立正大学の歴史」 於…品川キャンパス9号館1階大学史料編纂室常設展示スペース			
4月12日(金)					

令和元年度 立正大学百五十年史編纂委員会委員一覧

委員長	吉川 洋 (学長)
副委員長	野沢 佳美 (大学史料編纂室長)
委員	望月 兼雄 (理事長)
委員	宮川 幸三 (大学史料編纂室担当副学長)
委員	大場 一人 (付属中学・高等学校長)
委員	寺尾 英智 (学長指名委員)
委員	鈴木 厚志 (学長指名委員)
委員	早川 誠 (学識を有する教職員)
委員	平 伊佐雄 (学識を有する教職員)
委員	川上 優 (大学事務局長)
委員	伊東 肇 (大学副局長)
委員	栗田美千也 (学長室部長)
委員	河井 宏幸 (大学史料編纂課長)

令和元年度 立正大学百五十年史編纂委員会委員一覧

野沢 佳美 (大学史料編纂室長・文学部教授)
寺尾 英智 (仏教学部教授)
本間 俊文 (仏教学部専任講師)
石山 秀和 (文学部准教授)
平 伊佐雄 (経済学部准教授)
早川 誠 (法学部教授)
清水 海隆 (社会福祉学部教授)
鈴木 厚志 (地球環境科学部教授)

河井 宏幸 (大学史料編纂課長)
本岡 拓哉 (大学史料編纂課員)

令和元年度 立正大学史料編纂室運営委員一覧

編纂室長	野沢 佳美 (文学部教授)
委員	安中 尚史 (仏教学部教授)
委員	石山 秀和 (文学部准教授)
委員	平 伊佐雄 (経済学部准教授)
委員	佐藤 一義 (経営学部教授)
委員	早川 誠 (法学部教授)
委員	溝口 元 (社会福祉学部教授)
委員	吉岡 茂 (地球環境科学部教授)
委員	井田 政則 (心理学部教授)
委員	河井 宏幸 (大学史料編纂課長)

令和元年度 立正大学史料編纂室専門委員一覧

委員 (総務・広報)	早川 誠 (法学部教授) 【責任者】
委員 (総務・広報)	平 伊佐雄 (経済学部准教授)
委員 (史料調査・収集・整理・保存)	安中 尚史 (仏教学部教授) 【責任者】
委員 (史料調査・収集・整理・保存)	寺尾 英智 (仏教学部教授)
委員 (史料調査・収集・整理・保存)	本間 俊文 (仏教学部専任講師)
委員 (研究・編纂企画)	石山 秀和 (文学部准教授) 【責任者】
委員 (研究・編纂企画)	清水 海隆 (社会福祉学部教授)
委員 (研究・編纂企画)	鈴木 厚志 (地球環境科学部教授)

令和元年度 立正大学史紀要編集委員一覧

平 伊佐雄（経済学部准教授）【責任者】
安中 尚史（仏教学部教授）

令和元年度 立正大学史料編纂室スタッフ一覧

野沢 佳美（室長・文学部教授）
河井 宏幸（大学史料編纂課長）
本岡 拓哉（大学史料編纂課員）
島津千登世（専門員・アーキビスト）
佐藤 研一（専門員）
松尾 優子（専門員）

【すべて令和2年3月現在】

立正大学史料編纂室紀要発行要領

平成27年1月26日

規程公示第26-61号

(目的)

第1条 この要領は、立正大学史料編纂室（以下「編纂室」という。）が、立正大学史料編纂室規程第2条に規定されている目的をふまえ、本学（付属中学校・高等学校等を含む。）の歴史および関係者の事績に関する資料（以下「史料」という。）およびその調査・研究の成果を公表するために公刊する立正大学史料編纂室紀要（以下「紀要」という。）を発行する際の手続きを定めるものである。

(発行)

第2条 紀要は、原則として、年1号以上、発行する。

(掲載原稿)

第3条 紀要に掲載する原稿（以下「原稿」という。）は、以下の各号のものとする。

- (1) 史料の翻刻
- (2) 史料に関する調査報告
- (3) 本学の歴史および史料に関する研究論文
- (4) 本学の歴史および史料に関する研究ノート
- (5) 本学の歴史および史料に関する研修会・研究会・シンポジウムなどの記録
- (6) 本学の歴史および史料に関する文献の書評
- (7) その他、本学の歴史および史料に関する調査・研究にかかわる事項

(掲載原稿の執筆者)

第4条 紀要に掲載する原稿の執筆者（以下「執筆者」という。）は、以

下の各号の者とする。

- (1) 立正大学史料編纂室規程第8条に規定されている運営委員
- (2) 立正大学史料編纂室規程第12条に規定されている専門委員（以下「専門委員」という。）

- (3) 立正大学史料編纂室規程第4条に規定されている職員
- (4) 編纂室の業務の遂行に必要と認められる、本学の教職員および学外の関係者

(掲載原稿の仕様)

第5条 紀要の掲載する原稿の仕様は、以下のとおりとする。

- (1) 原稿を記述する言語は日本語とする。
- (2) 未発表の原稿とする。
- (3) 原稿の分量は、二四、〇〇〇字以内とする。ただし、編纂室が必要と認めた場合は、それ以上の分量の原稿も掲載する。
- (4) 表・参考文献・付録などは、掲載誌面上で占有する分量を字数に換算し、前号に規定されている字数に含める。
- (5) 原稿は、原則として、ワードプロセッサ・ソフトを用いて記述する。その書式は、縦書き・横書きとも、1行を40字、1頁を30行に設定する。
- (6) 原稿は、原則として、常用漢字と現代仮名遣いを用いて記述する。ただし、常用漢字がない文言および史料の記述は、この限りではない。
- (7) 原稿には、題名（副題を含む）、所属機関・部局名、執筆者名、本文・図表・注釈・参考文献などを記述する。
- (8) 執筆者は、他の著作物からの引用（図・表を含む。）には出所を明記し、編纂室へ原稿を提出する以前に、必要に応じて、当該著作権者の了解を得る。

(提出原稿の添付物)

第6条 執筆者は、原稿を編纂室へ提出する際、以下の各号のものを付す

る。

- (1) 執筆者の住所、電話番号、電子メール・アドレスなど連絡先
- (2) 第4条第4号のうちの、学外の関係者は、執筆者の所属および略歴
- (3) 二〇〇字以内で記述した原稿の要旨（以下、「要旨」という。）
- (4) 原稿および要旨の電磁的記録

2 執筆者は、前項第1号から第3号を所定の様式に記入する。

（原稿の提出方法）

第7条 原稿は、執筆者が持参、郵送、電子メール添付などにより、編纂室へ提出する。

2 執筆者には掲載号を3部贈呈する。

（原稿の編集）

第8条 原稿の編集は、立正大学史料編纂室規程第4条第1号に規定されている編纂室長が指名した専門委員（以下「編集委員」という。）若干名に諮り、編纂室が行う。

2 編纂室は、原稿を掲載する際、文字を統一し、図表の体裁などを整える。

（原稿の審査）

第9条 編集委員は、原稿を閲読し、掲載の可否を決定する。

2 編集委員は、編纂室より回付された原稿を2週間以内に閲読し、当該原稿の掲載の可否、修正の有無、修正を求める内容など審査結果を編纂室へ報告する。

3 編纂室は、原稿提出後6週間以内に、前号の審査結果を執筆者へ書面で通知する。

4 原稿の修正を求められた執筆者は、2週間以内に原稿を修正して、編纂室へ再提出する。

（原稿の校正）

第10条 執筆者による原稿の校正は、原則として再校までとする。

2 執筆者が校正の際に大幅な加筆や修正を行うことは、原則として認めない。

（原稿の著作権）

第11条 原稿の著作権および電子化の権利は、編纂室に帰属するものとする。

2 紀要に掲載した原稿は、立正大学学術機関リポジトリに登載する。

3 原稿の複製および転載には、編纂室の許可を必要とする。編纂室が他所への複製および転載を許可した場合、その許可を得た者は、その旨を複製物および転載物に明記しなければならない。

（執筆者への謝礼）

第12条 原稿の謝礼は、原則として支払わない。ただし、編纂室がとくに必要と認めた場合、所定の謝礼を支払うことができる。

（その他の事項）

第13条 この要領に規定されている以外の、紀要の発行に関する事項は、編纂室が専門委員に諮り、適宜措置する。

（改廃）

第14条 この要領の改廃は、編纂室が、専門委員に諮り、立正大学史料編纂室規程第7条に規定されている運営委員会の議を経て、これを行う。

附則

この要領は、平成26年12月9日から施行する。



編集後記

例年のように『立正大学史紀要』を発刊する時期になりました。早いもので5号を数えますが、5年前に緊張しながら創刊号の編集作業に携わったことを思い出します。ここまで続けられたのは、執筆者をはじめとする関係者の方々のおかげだと感謝しております。

今号の内容を確認すると、講演会記録は、『東海大学七十五年史』の編纂に尽力された椿田卓士氏によるものです。年史編纂に関わる方々にとって貴重な経験談を掲載しています。オーラル・ヒストリーは、第29・30代学長である高村弘毅名誉教授に本学との長い関わりや海外調査のお話をうかがってまとめました。余録では、立正大学発行の絵葉書に関する考察が展開されています。いずれも貴重な内容となっておりますので、ぜひじっくりとお読みいただければと思います。

前号までは校舎の写真を中心に本学の歴史をお伝えしてきた表紙ですが、今号は趣向を変えて、過ぐる日の学生生活が伝わる一枚を選んでみました。1906（明治39）年に日蓮宗大学林講堂の前庭園にて撮影された学生たちの記念写真です。本編纂室では、この写真の複写を保管しており、ここに写っている学生さんたちの名前も判明しております。写真奥の講堂は1916（大正5）年に焼失してしまいましたが、のちの1918（大正7）年には著名な建築家、辰野金吾氏設計による木造の講堂（日蓮宗大学講堂）が建設されることとなります。

（編集担当を代表して：松尾）



執筆者紹介（掲載順）

椿田 卓士（東海大学学園史資料センター学園史編纂員）

本岡 拓哉（立正大学学長室大学史料編纂課）

平 伊佐雄（立正大学経済学部准教授）

立正大学史紀要 第5号

2020（令和2）年3月25日 発行

編集・発行 立正大学史料編纂室

〒141-8602 東京都品川区大崎4-2-16

TEL 03-3492-2690 FAX 03-5487-3339

印刷 株式会社 白峰社

ISSN 2423-9542

JOURNAL OF THE HISTORY OF RISSHO UNIVERSITY

Vol. 5 March 2020

CONTENTS

Lecture:

Completing a compilation of the 75-year history of Tokai University

Takushi TSUBAKIDA (3)

Oral History:

An oral history of Hiroki Takamura, Professor Emeritus at Risho University

(25)

Column:

A new school building in Yayamagaoka: A study based on picture postcards

Isao TAIRA (47)